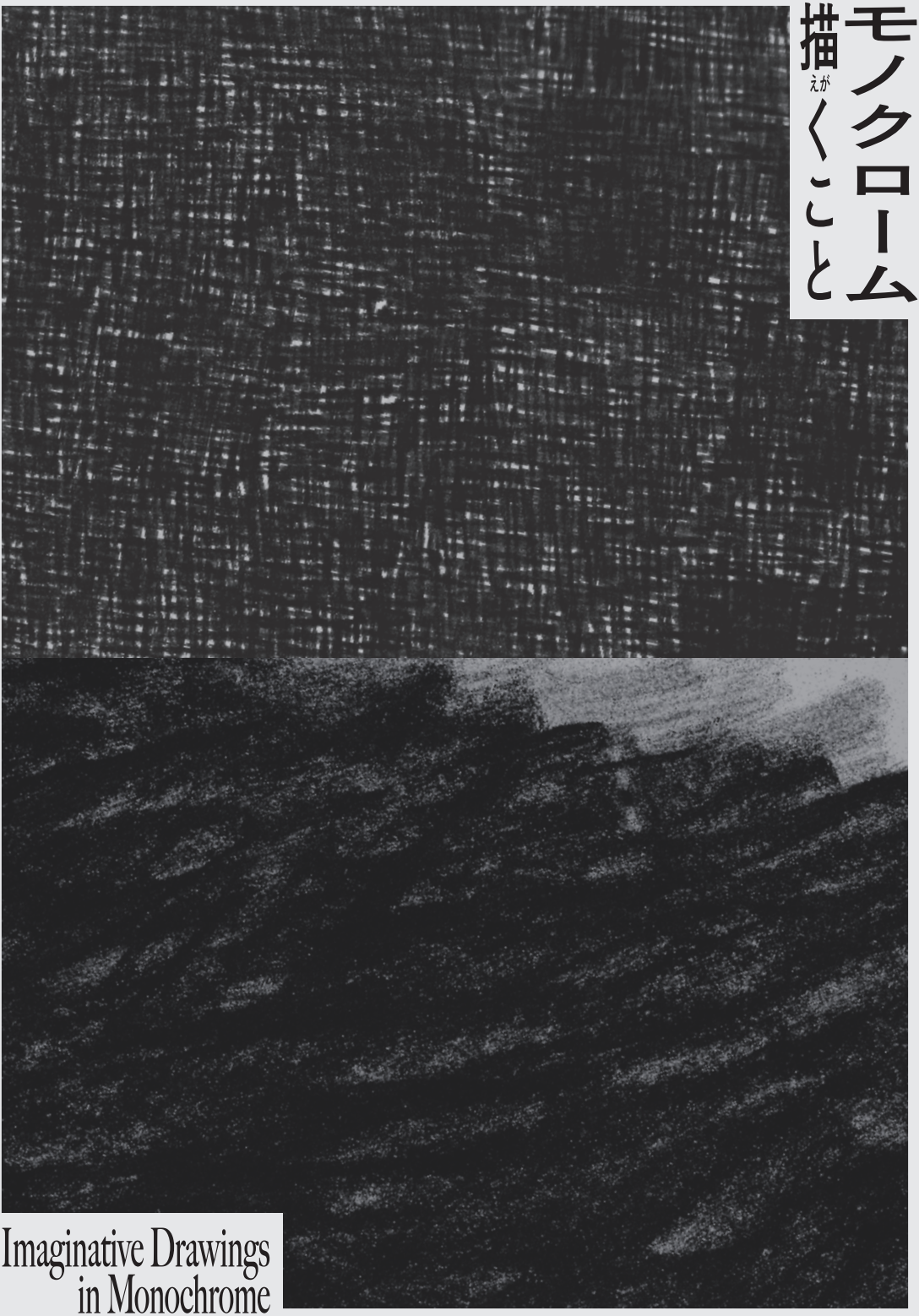
モノクローム描(えが)くこと



Imaginative Drawings in Monochrome

モノクローム描くこと

Imaginative Drawings
in Monochrome

モノクローム　描(えが)くこと
Imaginative Drawings in Monochrome

会期
2023年7月22日（土）-9月24日（日）

会場
東京都渋谷公園通りギャラリー　展示室1・2

主催
（公財）東京都歴史文化財団　東京都現代美術館　東京都渋谷公園通りギャラリー

Period
Saturday, July 22 – Sunday, September 24, 2023

Venue
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Galleries 1 and 2

Organizer
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、展覧会「モノクローム　描(えが)くこと」を開催いたします。

本展では、モノクロームの限られた色の中で描かれる独自の世界観に注目し、木炭やペン、ニードルなどの画材や道具を用いて対象を描き出したり、針金など描画には用いられることの少ない素材で形づくられたりする作品や、記された言葉や記号によってイメージが立ち現れてくる作品を紹介します。

描くという行為には、形があることも、形がないこともあります。道具をつかい、線や面で形を描くことも、心の中にイメージを思い描くことも、どちらも「えがく」と言うように、この言葉が表す行為には広がりがあります。一方、モノクロームと言うと、単色やグラデーションによる表現が思い浮かびます。しかし、白黒のモノクロームに限ってみても、画材や描き手の違いから、作品には無限に違いが生まれます。そして、白から黒への変化の中には様々な幅のグラデーションがあり、真っ白や真っ黒に見える時でも、僅かな色味の差が美しい陰影をもたらし、記憶の中にあるイメージを誘い出します。この時、わたしたちは、限られた色の中で鑑賞の視点が絞られ、おのずと作品を細やかに観察し、気づいた変化を自らの心に映して、描き出された事象の奥深くに広がるイメージの世界を感じているのではないでしょうか。描くことは、制作者だけではなく、鑑賞者が思い描くことでもあると言えそうです。

本展を通して、モノクロームから見えてくる豊かな創造と想像の世界を前に、自由に思い描くことをお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家の皆様、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心よりお礼申し上げます。

2023年7月
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
東京都渋谷公園通りギャラリー

モノクロームから広がる、描くこと

門あすか
（東京都渋谷公園通りギャラリー）

はじめに

「モノクローム　描（えが）くこと」展は、タイトルの通り「モノクローム」と「描くこと」をテーマとしている。モノクロームは、色合いに限らず単色を指し示す言葉で、出展作家も多彩な制作をしているが、このたび紹介する作品は白黒に限った。本展では、作家ひとりひとりの描画に的を絞って、その独自の世界観にふれることを目的としている。無彩色の世界の方が、描き手の特徴を見極めやすい。白黒に限ると、かえって個性が際立ち、表現の違いを比較しやすくなる。一方、描くことについては、作品からその意味に迫るため、一般的な描画の概念から少し広く捉えて、絵画の他に版画や立体を加え、独自の方法で創作を行う7名の作家による67点の作品を紹介した。作風は、模写や写生、架空の創作と多様で、表現も抽象から細密までと幅広い。作品の素材も、墨汁や木炭、ペンなどのオーソドックスな描画材の他に、紙の版や針金など様々だが、一般的な画材である鉛筆や絵の具などの作品は含まれていない。それほど、「描くこと」というテーマは広い。そこで、本展では、作品の奥にある制作者の眼差しや描く理由といった創作の源に目を向けるため、白黒のモノクロームの表現に条件を限って鑑賞の視点を絞ることとした。モノクロームのテーマ設定は、ピンホールから景色を見ると、普段よりもはっきりと見えるあの現象のように、周辺の情報を制限し、目的のみにフォーカスして見るための仕掛けだ。そのようにして、既存の美術の価値観にとらわれず独自の方法で創作を行う人々の表現を、作家や作品ごとに丁寧に観察して、描くことの本質に迫ることが本展の狙いだ。

展示室の様子

東京都渋谷公園通りギャラリーには特徴の異なる2つの展示室があり、絵画の**岡元俊雄**、**高橋和彦**、**西岡弘治**、**平瀬敏裕**、**吉川敏明**の5名は、四方に壁を立てた展示室1において、版画の**堀口好輝**と立体の**たぬきだshin**の2名は、室内にらせん階段を備えた開放的な展示室2において紹介した。図らずも、展示室1は、海外で日本のアール・ブリュット／アウトサイダー・アートとして紹介された経歴をもつ作家が多く、展示室2は、これまで国内の特に関西地域での発表歴が中心の作家となった。空間は壁で仕切らず、鑑賞の順路にも決まりを設けていないが、作家や作品は、作風や表現や画材で緩やかにつながるように配置した。加えて、7名の作家のうち、岡元、たぬきだshin、西岡、平瀬、堀口の5名は、筆者が撮影した映像や作家の関係者が撮影した映像を編集して展示した。映像では、作家の描く姿、クローズアップされた手元が映っている。モニターは、作品を見た後に見ることができるよう、展示室の奥に設置した。展示室は、作品、映像、解説などの様々な情報を見比べながら鑑賞を深めることができるような設えになっている。

それぞれの描くこと、制作の様子

ここからは、展示室1の中央に位置し、入室すると最初に出会う岡元、続いて壁沿いを時計回りに、西岡、平瀬、高橋、吉川、展示室2の堀口、たぬきだshinの順で、作家ごとに描画の特徴や、共通点と相違点などを記す。

岡元の描画方法は独特だ。紙を置いた床に片肘ついて横たわり、本や雑誌、写真などを見ながら実寸よりも大きな人物画を描く。寝そべって画面に向かうと視界にパースがつき絵も歪んでしまいそうなものだが、墨汁と1本の割り箸を使い堂々と描かれた人物画からは、擦れた面や細い線の重なりから生まれる奥行き、飛沫がもたらす躍動感など、豊かな描画の技術を見て取ることができる。走る車の窓から見たトラックを描いた作品では、動くモチーフが細かなディテールまで描き込まれており[1]、岡元が目で捉えた形を記憶して描いていることが分かる。その独自の眼差しこそが真の特徴だ。

続いて、壁の展示も墨で描いた作品から始まる。墨汁と筆で描いた作品《塔》と《十字架Ⅰ》[2]からは、線のフォルムへのこだわりを読み解くことができる。ペンを用いて楽譜を模写するドローイングで知られる西岡の作品は、忠実な描き写しではなく独特のアレンジが施されている。模写というよりは、モチーフにしているという表現の方が正しいと感じるほどに変化しているが、本展の関連イベントとして行った公開制作[3]の際も、これまで何度も描いてきた楽譜をじっと見つめてから画用紙へとボールペンで丁寧に描き込んでいたため、本稿では、敢えて模写と記す。ボールペンは、線を均一に引くのに適した道具だが、西岡は、何度も描き重ねて線にフォルムをつける。ペンの線と筆で描いた線とを見比べると、揺らぎ方に類似性があることに気がつく。西岡の線を視線でなぞっていくと、フォルムが音の揺らぎのように心地よく、まるで音楽が奏でられているかのように感じる。

同じくペンを用いる平瀬は、×印が集まり矩形の色面にみえる抽象画を描く。本展では、×印がはっきりと描かれた第一作[4]から約10年間の作品を展示した。細部を見比べると×印は、徐々に形が崩れてVやWになっている。映像では、平瀬独特の方法、定規をあてて水平を意識しながら描く姿がある。まるで手紙をしたためるように描く様子や、ノートに×印を書（描）いたことが創作のきっかけであったというエピソードなどからは、描くことが平瀬独自のコミュニケーション手段である可能性を感じずにはいられない。わたしたちは何を見てそれを美術作品だと認めるのかを問いかけてくる作品だ。

一方、高橋の作品は、ペンを用いて具体的なイメージを描き込んだ細密な風景画だ。A4サイズの小作品には概ねひとつの場面が、大きな作品にはいくつかの場面がコラージュして描かれる。描か

れるのは、写真の他、高橋が実際に目にした景色や体験をもとにした場面で、画面の左下から反時計回りに描いていたという[5]。本展の作品も、高橋が暮らした岩手県にまつわるモチーフや生活の一場面だ。旅が好きで、2010年にはフランスを訪れている。施設に残る大量のドローイングには、《謎の建物》[6]のような海外の建物を想起するモチーフもあった。高橋の風景画は、制作者の中にあるイメージをもとにした創造の世界だが、鑑賞者の中にあるイメージをも誘い出し、二者の創造と想像の世界がオーバーラップして不思議な感覚をもたらす作品だ。

同じく身近な風物をモチーフとした吉川は、主に1981年から1982年頃に描かれた木炭デッサンを展示した。木炭は、アカデミックな印象のある画材だが、吉川は、日本画家・西垣籌一（ちゅういち）（1912-2000年）の指導する「みずのき絵画教室」[6]で制作していた。ただし、指導と言ってもどのように描くのかは、当人に委ねられていたという。実際、筆者が参照した先行資料の作家解説に記されている制作の様子の通り、吉川の木炭の使い方は荒々しく[7]、構図も極端にクローズアップした独特の切り取り方をしていて、木炭デッサンを学んだことのある人の描き方とは異なる特徴をもっている。また、木炭は何度も描き直しの利く描画材だが、吉川の画面には、ほとんどその様子がない。[8]そのため、炭の色が曇ることなく黒々と画面に留まり、余白に流れ落ちた粉がつくり出す景色は新鮮で美しい。[9]本展では、とくに構図に特徴のある作品を選んだ。なかでも、玉ねぎをモチーフとした4点[10]は、西垣氏が行った「造形テスト」に通じるような構成が見られる。

続いて展示室2に移る。堀口の版画は、版を堀口が制作し、刷りを通所する施設の職員が行う共同制作による作品だ。制作は2009年頃に始まった。日頃の堀口が短いストロークで描く様子から、ニードルで紙の版を削って描く、ペーパードライポイントと通称される手法に思い至ったという。映像からは、真っ白な版を手探りで削っている様子を見ることができる。白い版の状態では、形をほとんど視ることはできないが、刷ることで緩いフォルムをしたモチーフの姿が浮かび上がる。かわいらしいアイテムが好きだという堀口の好みを反映するかのようにやわらかい印象の作品だ。

一方、たぬきだshinの作品は、想像上の船や空想的なキャラクターなど自由にイメージしたモチーフを、太さの異なる針金を自在に操り、まるで空間にデッサンするかのように非常に緻密に造形して生み出している。映像は、筆者の訪問時の会話をきっかけにつくりはじめた蜻蛉が、たった16分ほどで完成する様子を編集したものだが、途中にやり直すような所作は一切なかった。どの立体も、必要最小限で造形されており、見た目以上に針金の密度は低く、重量も軽い。たぬきだshinの頭の中で想い描かれたモチーフが、作家の手わざを通して実体となる時、一体どのような変換が行われているのだろうか。

おわりに

既存の価値観にとらわれず独自の方法で創作を行う人々による表現は、時に衝動と結びつけて語られることがある。人が表現するということには、必ずそういった側面もあるだろう。しかし、白黒のモノクロームという、ピンホールのような狭い視点に絞り、覗いた世界に浮かび上がってきたのは、研ぎ澄まされた眼差しと豊かな表現力、優れた手わざと独創的な創作の姿だ。展示室では、鑑賞者が作品に近づいて目を凝らす、解説や映像から描画スタイルに目を見張り作品と作品、作品とモニターの間を行き来するなどしながら、時間をかけて鑑賞している様子が見られた。アンケートにも、シンプルな色の中に表現の多彩さを感じる、迫力や繊細さが伝わってきた、映像を見ると作品の見え方が変わるなど数々の感想が寄せられた。本展が、新たな視点から作家や作品に出合い、鑑賞者の心の中にも想像の世界を広げるきっかけをつくることができていたなら幸いである。

1　本カタログp.18参照
2　本カタログp.44参照。楽譜を描く以前の初期作品
3　本カタログp.70参照。ドローイング+トーク「おんがくが みえる、きこえる絵とその物語」
4　本カタログp.50参照。5-1《敏裕の世界2000》2000年
5　本カタログp.25参照
6　本カタログp.62 *1参照。教室では、静物写生や戸外での写生が行われていたという
7　本カタログp.62参照
8　「ある時は画面の左から右へ順番に描き進んでいき、末端までくると終了となる。修正や手直し等は全く行われない。しかし出来上がった空間構成は絶妙で、完璧ともいえるものである。」『みずのき寮からの発信　言葉はいらない 魂との出会い』展カタログ、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、1999年、p.57より
9　「木炭は彼が好んだ画材であり、独自の深い黒色は誰も真似ることができなかった。」西村陽平監修『みずのきの絵画　鶏小屋からの出発』東方出版、2003年、p.100より
10　本カタログpp.66-67参照

展覧会記録映像とあわせてご覧ください。
Please see also the video recording of the exhibition.

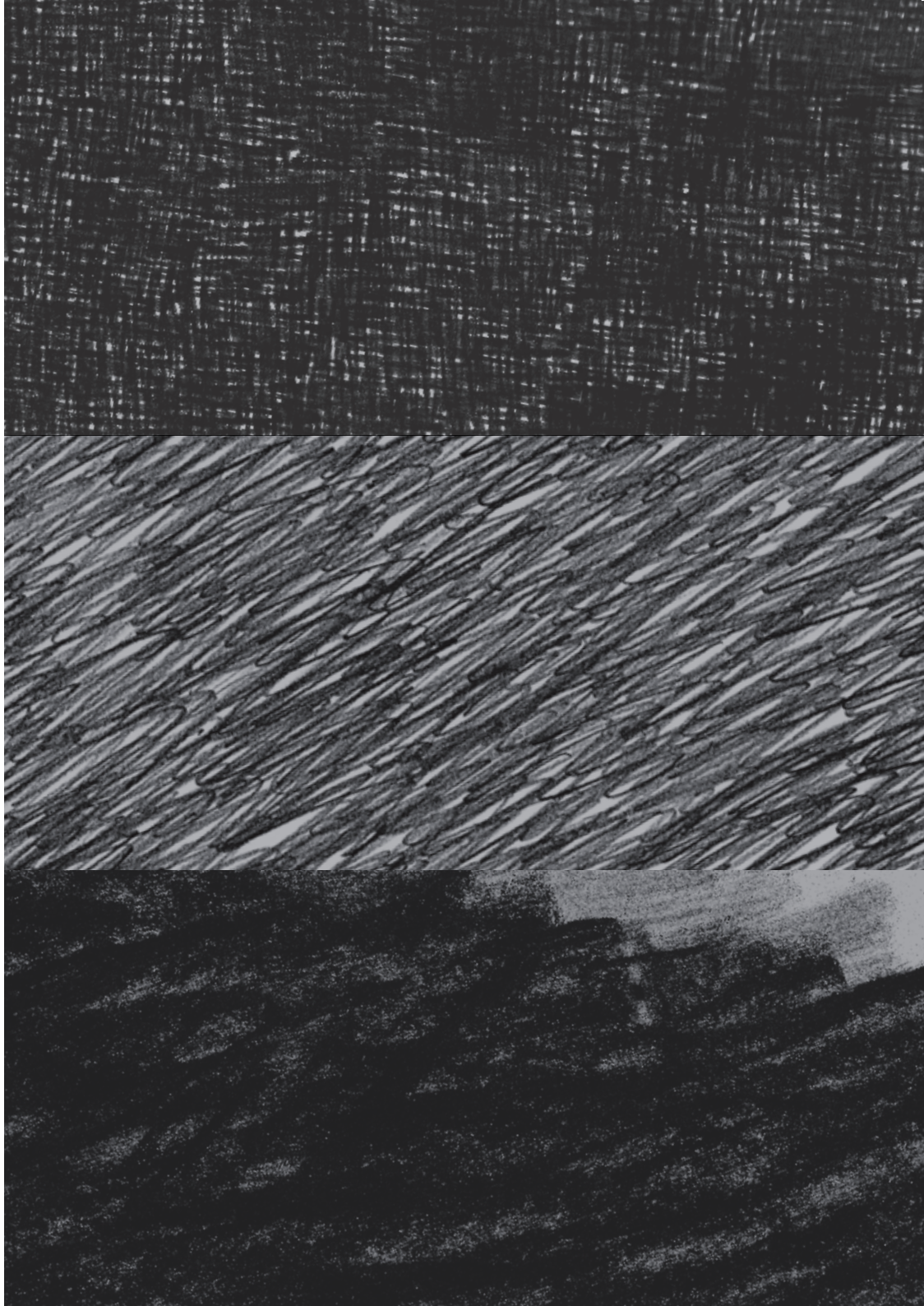
https://youtu.be/_Kfgf9SuyTk

凡例

- 各ページの図版キャプションは、pp.76-79の作品リストに対応している。
- リストの作品情報は、作品番号、作品名、制作年、技法／材質、サイズ（縦・高さ×横・幅×奥行、cm）の順で記載した。
- 作品情報は、東京都渋谷公園通りギャラリーの調査したデータに加え、作家と所蔵先から提供されたデータを参照した。
- 写真／アートワークのクレジットは、p.86と巻末に記載した。

Notes

- The captions on each page correspond to the list of works on pp.76-79.
- Information for each artwork in the list is given in the following order: Number, Title, Date, Techniques/Materials, and Size (height × width × depth, cm).
- Information on the works is based on data provided by the artists and collectors, in addition to data researched by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.
- Photo and Artwork Credits are listed on p.86 and at the end of this catalogue.



東京都渋谷公園通りギャラリー
モノクローム
描くこと
Imaginative Drawings in Monochrome
2023.7.22 −9.24

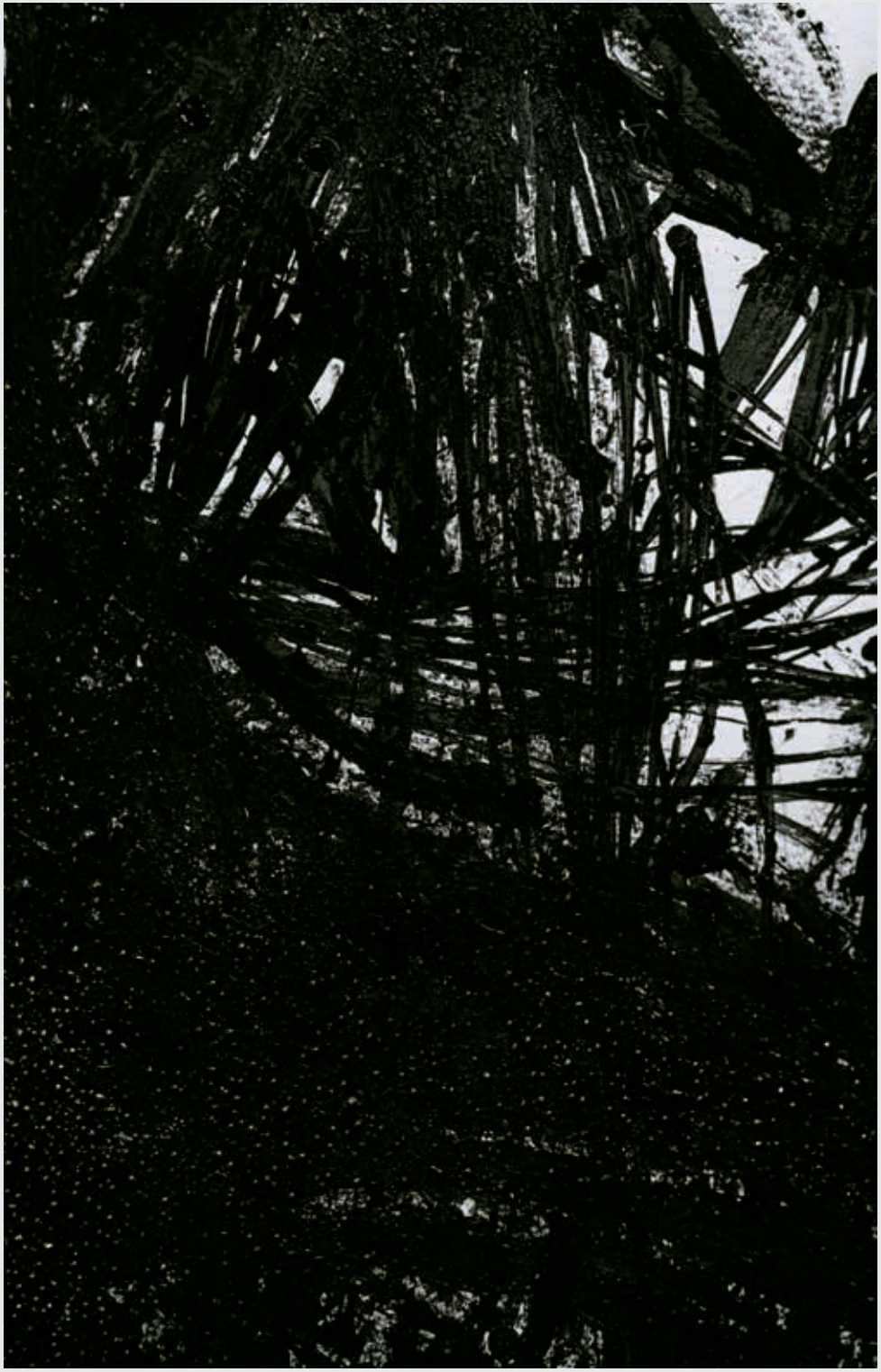
OKAMOTO Toshio

岡元俊雄

1978-

滋賀県生まれ。1996年から、やまなみ工房（滋賀県）に所属。岡元が描画に用いるのは、墨汁と先を尖らせた1本の割り箸のみ。変形するほど墨が固着した割り箸を自在に操り、先を寝かせて太い線を重ねて面にしたり、立ててシャープな線を繰り返し引いて濃淡を生み出したりしながら、写真や実際に見たモチーフを新たなイメージに変換して写しとる。お気に入りの音楽を聴きながら、体を揺らしたり寝転がったりして制作するリラックスした雰囲気とは裏腹に、鋭い観察眼と迫力のある表現が魅力の画家だ。ドライブ中の車窓から熱心に見つめていたというトラックは、通り過ぎる視界の変化に忠実に、正面のエンブレムや、側面の文字、背面のバックランプのディテールなどを細かく捉えながら展開図のように描く。岡元の代表的なモチーフである雑誌や画集を見ながら描く人物は、時に真っ黒になるまで塗りつぶされるが、墨汁を飛び散らせながら素早く重ねる筆致は、線に躍動感と奥行きをもたらし、威風堂々たる人物の姿を浮かび上がらせる。
主な出展歴に、2017-2018年「日本のアール・ブリュット　KOMOREBI展」フランス国立現代芸術センター“リュー・ユニック”（フランス）の他、国内外で多数の発表歴がある。

Born in Shiga Prefecture. Since 1996, a member of Atelier Yamanami (Shiga Prefecture). OKAMOTO Toshio draws using only a single disposable chopstick, its sharpened tip dipped in India ink. The chopstick, deformed by layers of dried ink, he freely manipulates, laying its tip on the side to make thick lines and paint a color field or else standing it to make repeated sharp lines and produce shading. Working in this way, he draws a subject seen in a photo or in reality, transforming it into a new image. Despite the relaxed mood in which he works, swaying rhythmically or lying on his side while listening to his favorite music, his strength as an artist is his keen eye for observation and powerful expression. A truck eagerly observed from a car window, during a drive, he will draw in the manner of a net (polyhedron), faithfully rendering details of the changing passing scene—the truck's front emblem, lettering on its sides, and rear lights. Okamoto's dominant motif is portraits of people, depicted while looking at a magazine or art book. His rapid, ink-splattering strokes, although applied so densely the image is sometimes blotted out, impart depth and dynamism to his lines and bring his portraits of imposing-looking persons to life.
His numerous exhibitions in Japan and abroad include the 2017-2018 “KOMOREBI Art brut japonais” (Le Lieu Unique, Scène Nationale de Nantes, France).



1-10　男の人 ｜ 2017年（部分）

1-10　男の人 ｜ 2017年　　1-7　男の人 ｜ 2014年　　1-6　男の人 ｜ 2022年　　1-3　女の人 ｜ 2013年

1-4　女の人 | 2013年　　1-5　男の人 | 2018年

1-8　男の人 | 2015年　　1-9　女の人 | 2022年

上から：　1-12　トラック ｜ 2008年　　1-13　トラック ｜ 2008年

1-5　男の人 ｜ 2018年

1-2　男の人 ｜ 2014年　　1-1　女の人 ｜ 2014年

1-11　男の人 ｜ 2022年

資料映像 ｜ 2023年

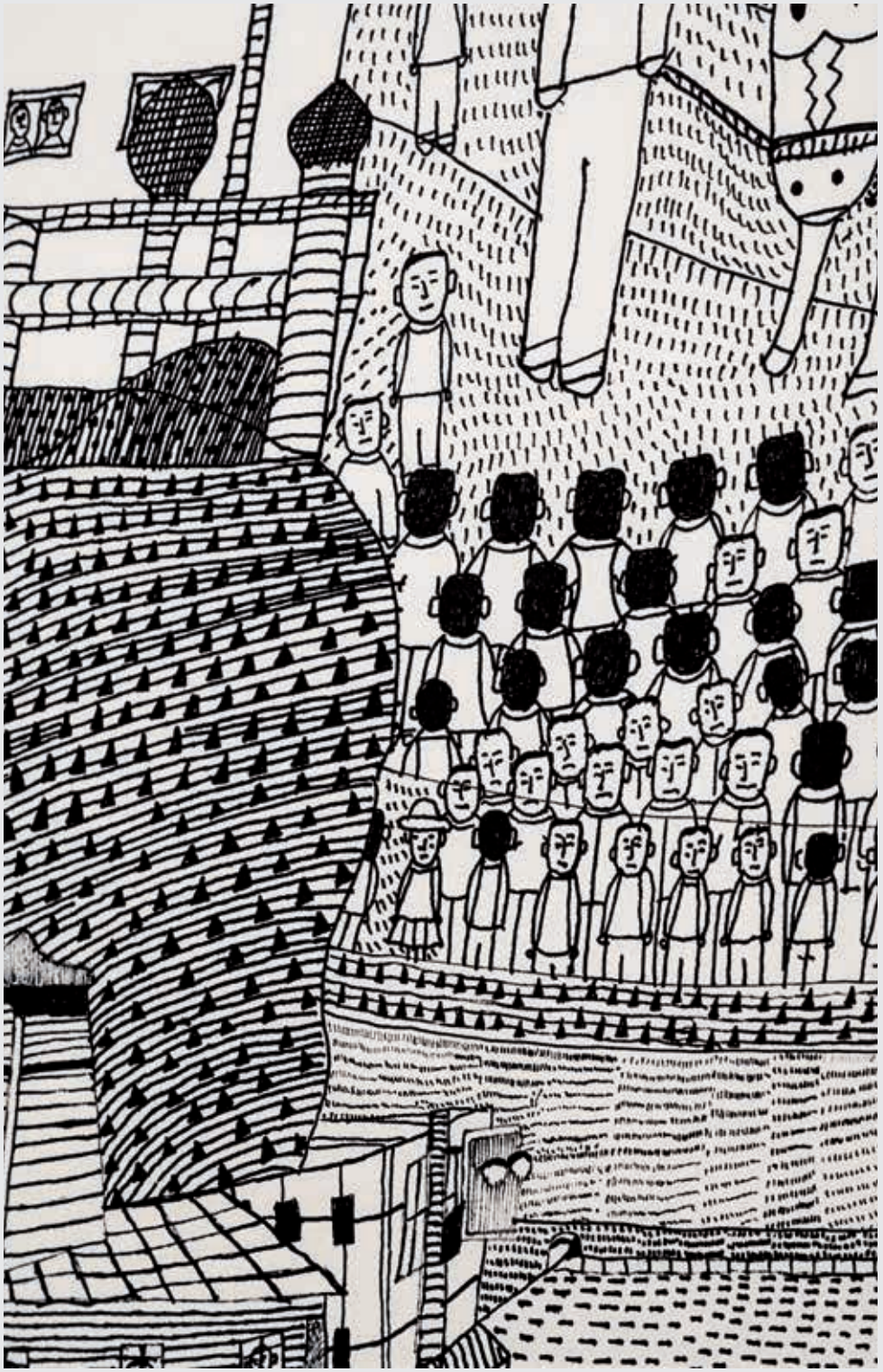
TAKAHASHI Kazuhiko

高橋和彦

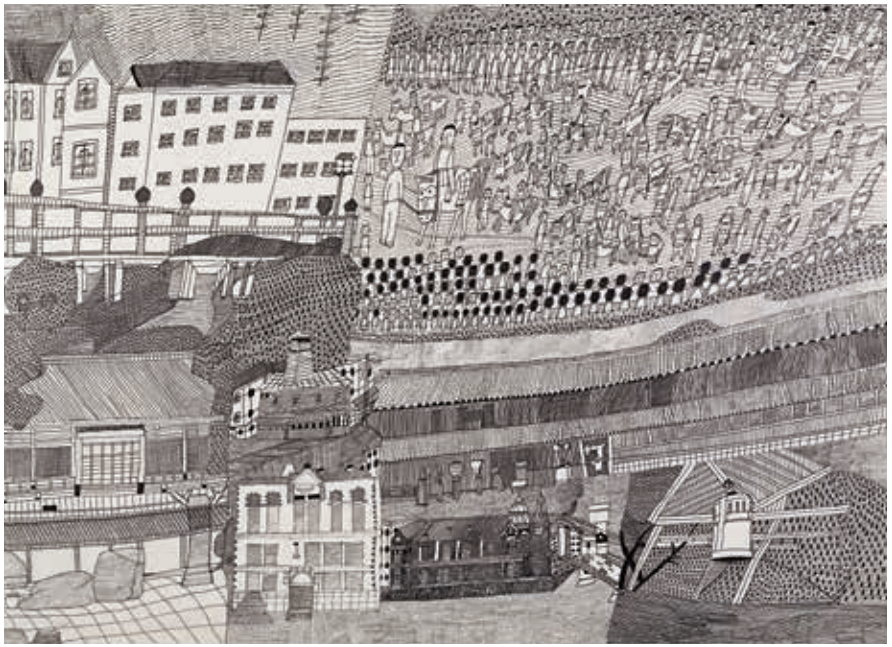
1941-2018

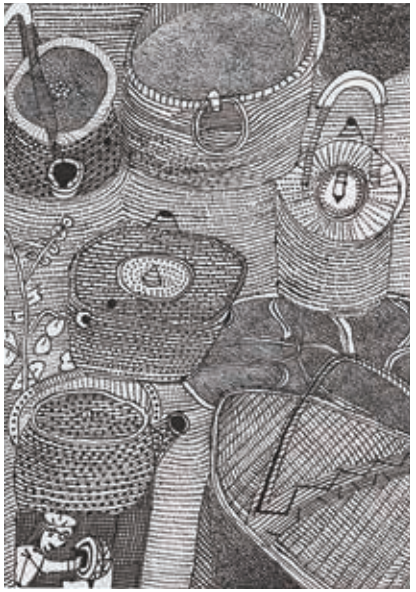
岩手県生まれ。中学卒業後、製麺会社や福祉工場で働いてきた高橋は、通所していた盛岡杉生園（岩手県）において1999年から始まった創作クラブをきっかけに、58歳にして初めて本格的に絵を描いた。2000年には、岩手県障がい者文化芸術祭に出展して特別賞を、翌年には優秀賞を受賞。以降、国内外の多数の展覧会へ出展し、熱心に創作を続けた。施設には、コピー用紙やスケッチブックなどに高い密度で描き込まれたペン画のドローイングが300点以上残されているが、家では描かなかったという。題材は、本や写真、実際に見た風景などの記憶をもとに、様々なエピソードとモチーフをコラージュのように構成している。心象風景のような絵画世界は、幻想的な雰囲気で、見る者の記憶の中にある、街のざわめきや人々の生活の気配を色あざやかに喚起する。建物や群像の中に、ユーモラスなしぐさの人物がこっそりと居るのを探すのも楽しい。
主な出展歴に、2010-2011年「アール・ブリュット・ジャポネ」パリ市立アル・サン・ピエール美術館（フランス）などがある。

Born in Iwate Prefecture. After graduating from junior high school, TAKAHASHI Kazuhiko worked various jobs including a noodle-making plant and a sheltered factory. At age 58, he produced a painting for the first time when, in 1999, an art club formed at the facility where he spent his days, Morioka Sanseien (Iwate Prefecture). He submitted work in the Iwate Prefecture Disabled People's Arts and Culture Festival and won the special prize in 2000 and, in the following year, the award of excellence. He thereafter devoted himself to art, exhibiting in numerous shows in Japan and abroad. Today, the facility retains over 300 high-density pen drawings Takahashi produced on copy paper and in sketchbooks. He did not create at home, it is believed. His works, composed in a style reminiscent of collage, depict stories and subjects on the basis of books, photos, and memory of actual scenes. His picture world, which is like an imagined landscape, vividly evokes the bustle of cities and livelihoods of their inhabitants, in a dreamlike atmosphere.
His main exhibitions include the 2010-2011 "Art Brut Japonais" (Halle Saint Pierre, France).

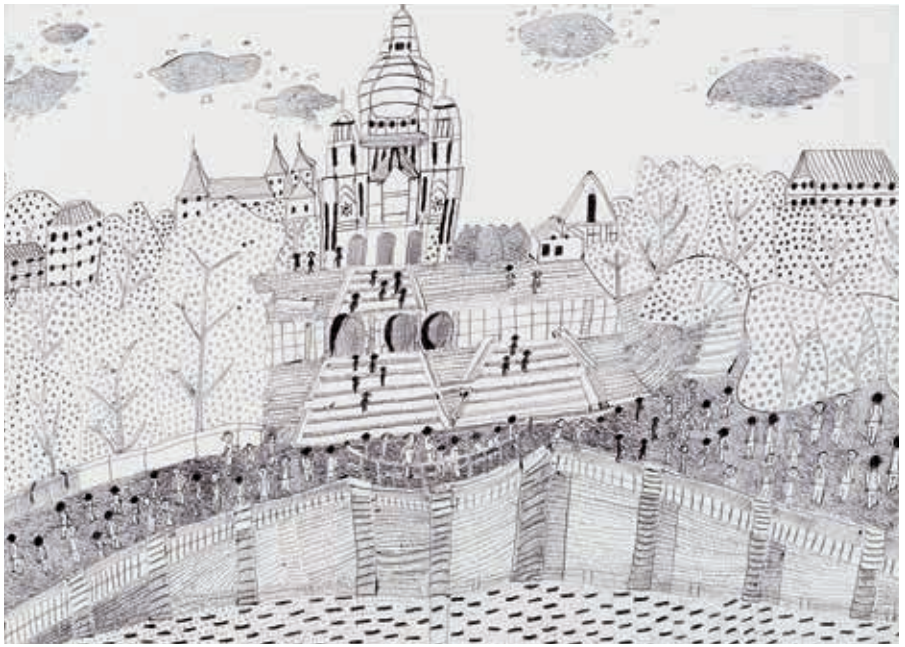


2-1　盛岡哀愁 ｜ 2012年（部分）





上｜2-1　盛岡哀愁 ｜ 2012年　　下｜2-3　チャグチャグ馬コ ｜ 2007年　　2-4　南部鉄器 ｜ 2006年



上｜2-2　謎の建物 ｜ 2014年　　下｜2-5　人のつながり ｜ 2013年

Tanukidashin

たぬきだshin

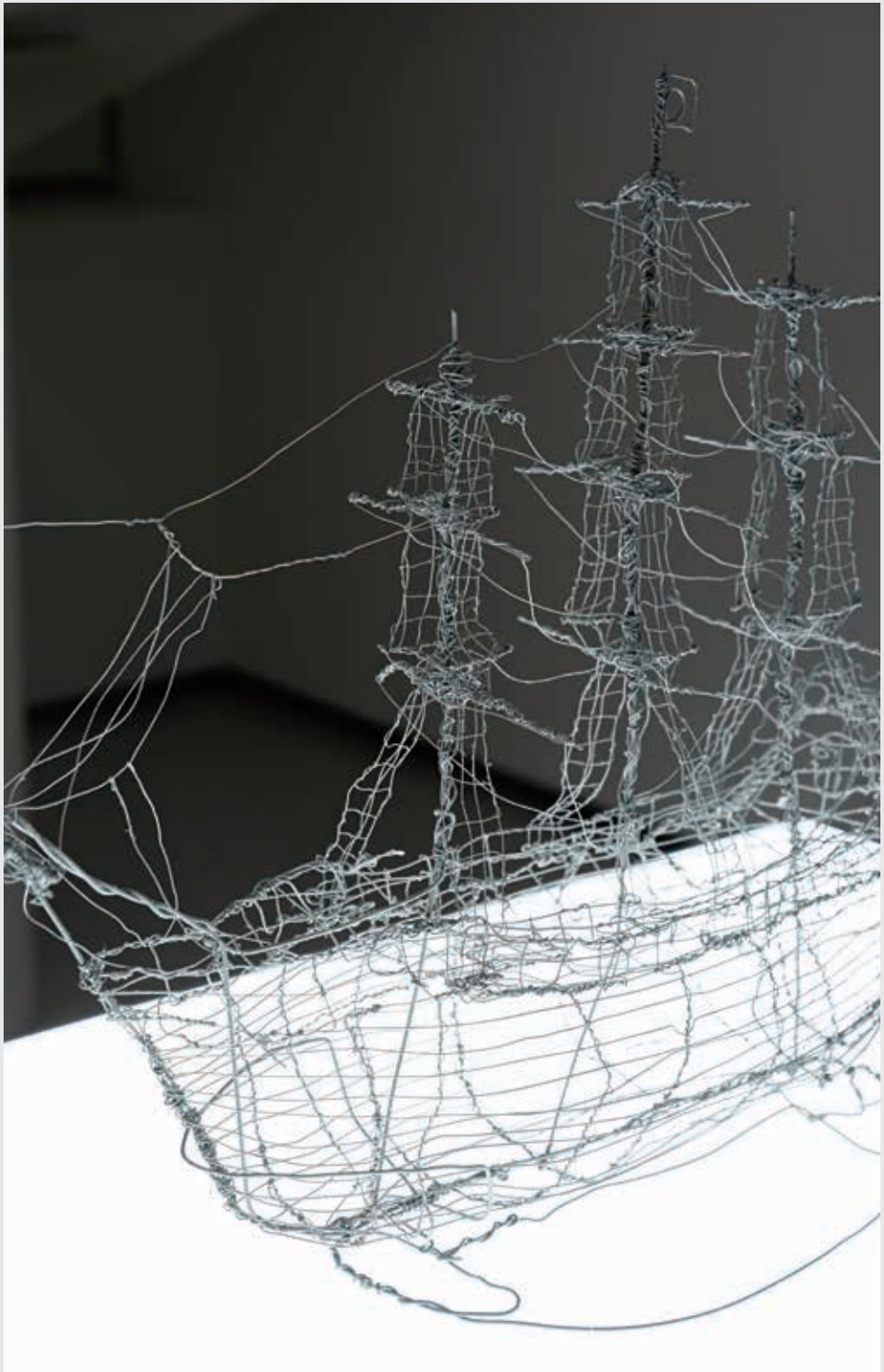
1999-

兵庫県生まれ、兵庫県在住。中学3年生の時から始めたという針金を唯一の素材に造形される立体は、様々な太さを使い分ける独自の手法で、まるで線画のスケッチのように船や飛行機、生き物などの多様なモチーフを三次元空間へ写実的に描き出す。作品のモチーフは、本などの資料や、作家の暮らす港町で見る船などをヒントに創作され、構造を考慮したうえで装飾が施されている。大きな工業物から、ファンタジー小説や映画にあたかも登場するかのように精緻なキャラクターに至るまで、全てオリジナルのイメージだ。中学生の時に出展した「こころのアート展」をきっかけに、創造性にあふれた造形力が注目される。本展に出展する《薩摩丸》は、『アール・ブリュットが繋ぐ』*において、解説と共に図版が紹介された初期作品の1点。高校生の時に在住地域の展覧会へ出展した他、卒業後は、社会人としての生活と並行して、デザインやクラフト系のイベントへ出展している。
主な出展歴に、2014年「第四回『こころのアート展』in しあわせの村 2014」（兵庫県）などがあり、同展ではワークショップの講師も務めた。

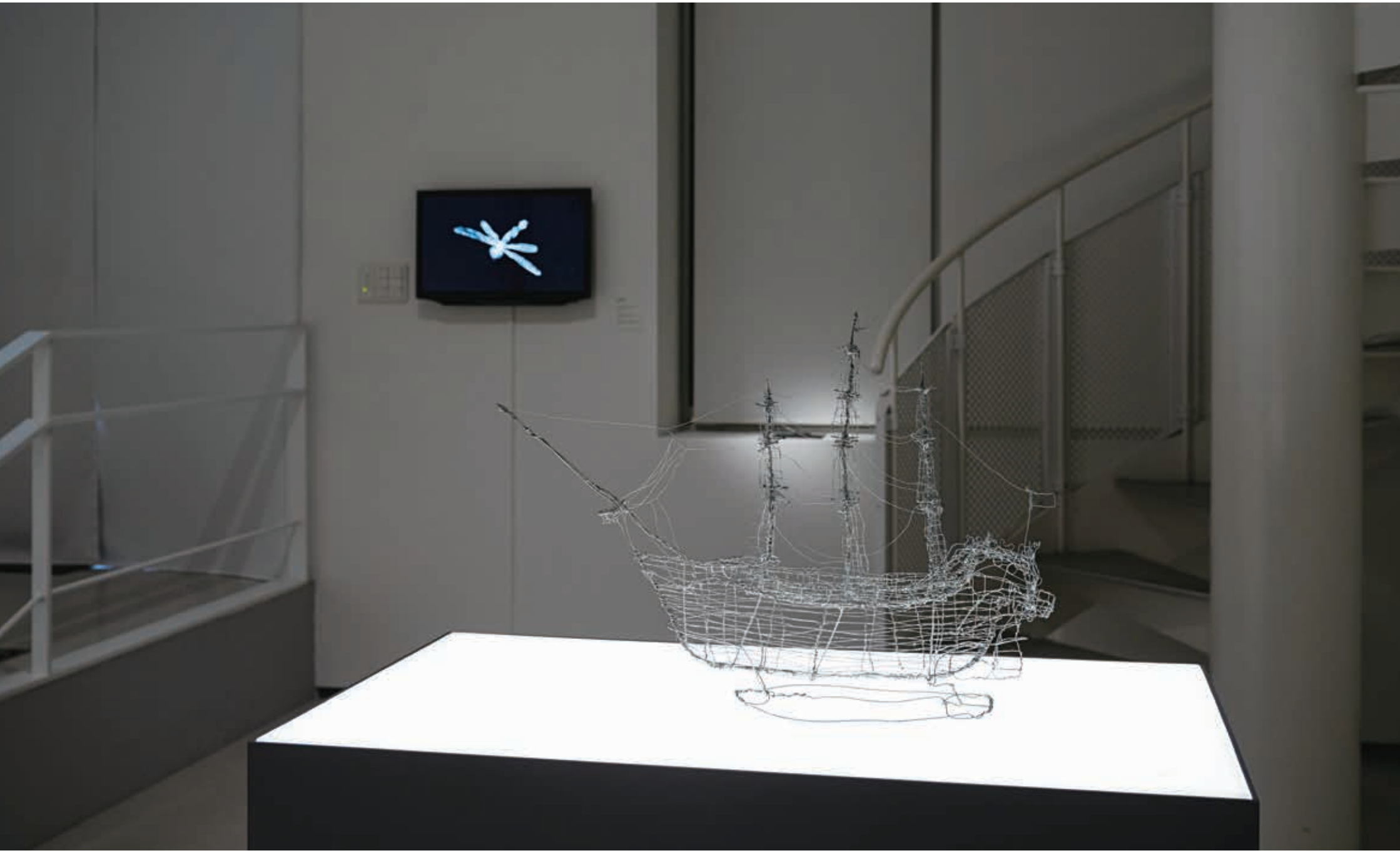
*『アール・ブリュット魅力発信事業報告書 アール・ブリュットが繋ぐ　平成27年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業』アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会、2016年

Born in Hyogo Prefecture, where he now lives and works. When a third-year junior high student, Tanukidashin began making sculptures using only wire as a medium. Following a method of his own based on selectively using wire of different thicknesses, he realistically depicts ships, airplanes, and living creatures as if sketching line drawings in three-dimensional space. To produce his sculptures, he shapes an image in his mind, drawing from books or ships seen in the port city where he lives, while giving careful thought to its structure. He then makes a skeleton and embellishes the piece decoratively. His images, ranging from large-scale industrial products to characters one might encounter in a fantasy novel, are entirely original creations of his own. His sculptural talent and overflowing creativity drew attention when, as a junior high student, he submitted work in the "Kokoro no Aato-ten" exhibition. *Satsuma-maru*, the piece featured this time, is an early-period sculpture that appeared along with commentary in a plate in *Art Brut Connects*.* Besides exhibiting in regional art exhibitions in his high school years, he has exhibited in design and craft events since graduating, in parallel with his regular employment.
His main exhibitions include the 2014 "4th 'Kokoro no Aato-ten' in Shiawase no Mura 2014" (Hyogo Prefecture), during which he led a workshop.

* "*Art Brut Connects: Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the Fiscal 2015: A Report of the Program to Promote Art Brut*", Executive Committee for the Program Art Brut, 2016



3-1　薩摩丸 | 2014年（部分）

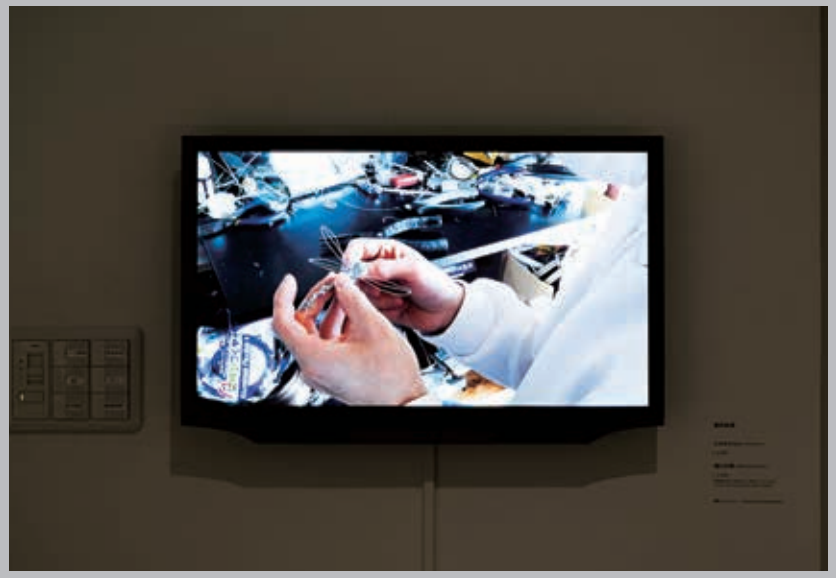


3-1　薩摩丸 ｜ 2014年

3-5　ミノタウロス ｜ 2021年

上｜3-4　蛇龍 ｜ 制作年不詳　　中｜3-2　蜘蛛魔女 ｜ 2020年　　下｜3-3　リザードマン ｜ 2020年

3-6　水上機 ｜ 2020年頃　　3-8　外からみるアリ ｜ 2022年　　3-7　外からみるクモ ｜ 2022年



資料映像 ｜ 2023年

NISHIOKA Koji

西岡弘治

1970-

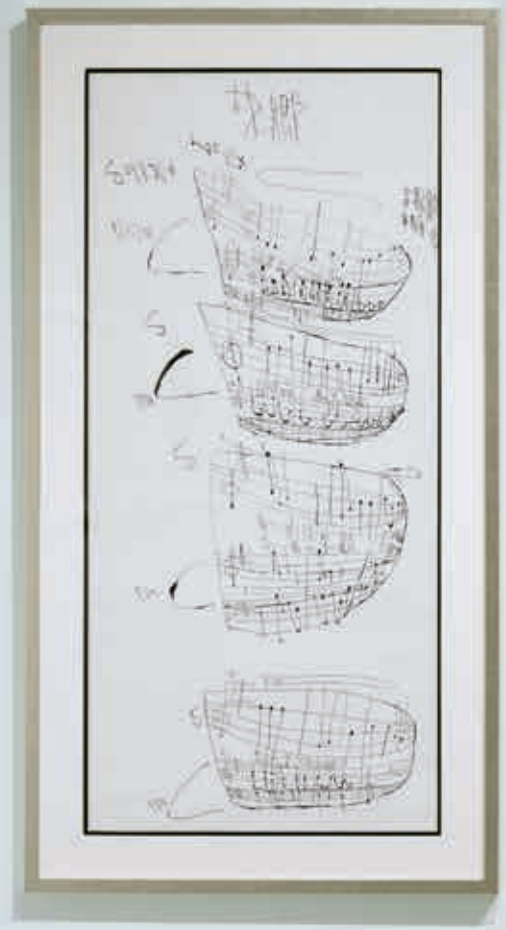
大阪府生まれ。アトリエコーナス（大阪府）の初期メンバーとして2005年より創作活動を開始。気になる文字を強調して描くスタイルで新聞の番組欄や相撲の番付などを模写していたが、施設にピアノと楽譜が寄贈されたことをきっかけに、現在の作風となった。几帳面な性格で、楽譜を傍らに置き、画面の描画と何度も確認しながら線を引いたり、描き重ねたりして、子どもの頃に親しんだクラシックやアニメソングの記憶を反芻するかのように、お気に入りの楽譜を描き続けている。旺盛な創作の手が止まった時期もあったというが、西岡の心の内が語られることはないため、その理由を知ることはできない。しかし、独特の揺らぎをもって近づいたり離れたり、描き重ねられて太くなったりする五線譜と音符や休符、文字や記号などが、音楽が好きという西岡の気持ちを、画面の中で情感豊かに奏でている。

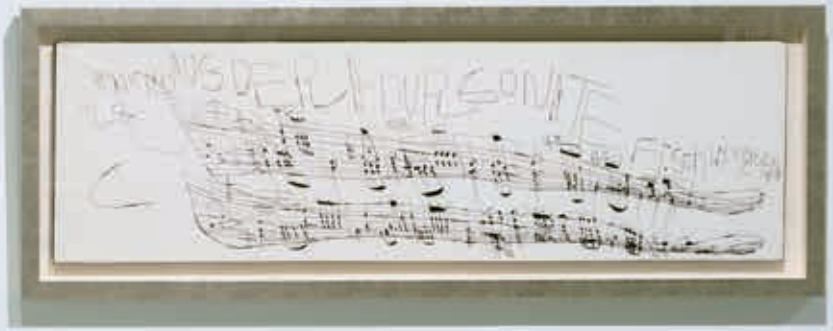
主な出展歴に、2015年「Art Brut Live, abcd collection」DOX Centre for Contemporary Art（チェコ共和国）の他、国内外で多数の発表歴があり、abcd財団（フランス）などに作品が収蔵されている。

Born in Osaka Prefecture. NISHIOKA Koji embarked on production in 2005 as an early member of atelier CORNERS (Osaka Prefecture). After initially copying TV program listings in the newspaper and Sumo wrestler rankings, carefully exaggerating the form of particular letters he liked, he attained his current style when a piano and sheet music were gifted to the facility. Methodical in character, Nishioka transcribes his favorite scores, placing a score near him and referring to it repeatedly while drawing lines and musical notation, seemingly absorbed in memories of the classical music and anime songs he enjoyed in childhood. There was a time, as well, when his daily drawing practice came to a halt for a long period. We cannot know why, for he never speaks aloud of what it is in his heart. In Nishioka's stead, his lines with their notes, letters, and symbols, soaring out and back with a distinctive flourish or converging in black pools, perform with rich emotion in his pictures and express his feelings as a music lover.

His numerous exhibitions in Japan and abroad include the 2015 "Art Brut Live, abcd collection," DOX Centre for Contemporary Art (Czech). His work is collected by abcd (art brut connaissance & diffusion [organization], France) and other cultural organizations.

4-7　楽譜 AUSDER A-DUR SONATE ｜ 2009年（部分）

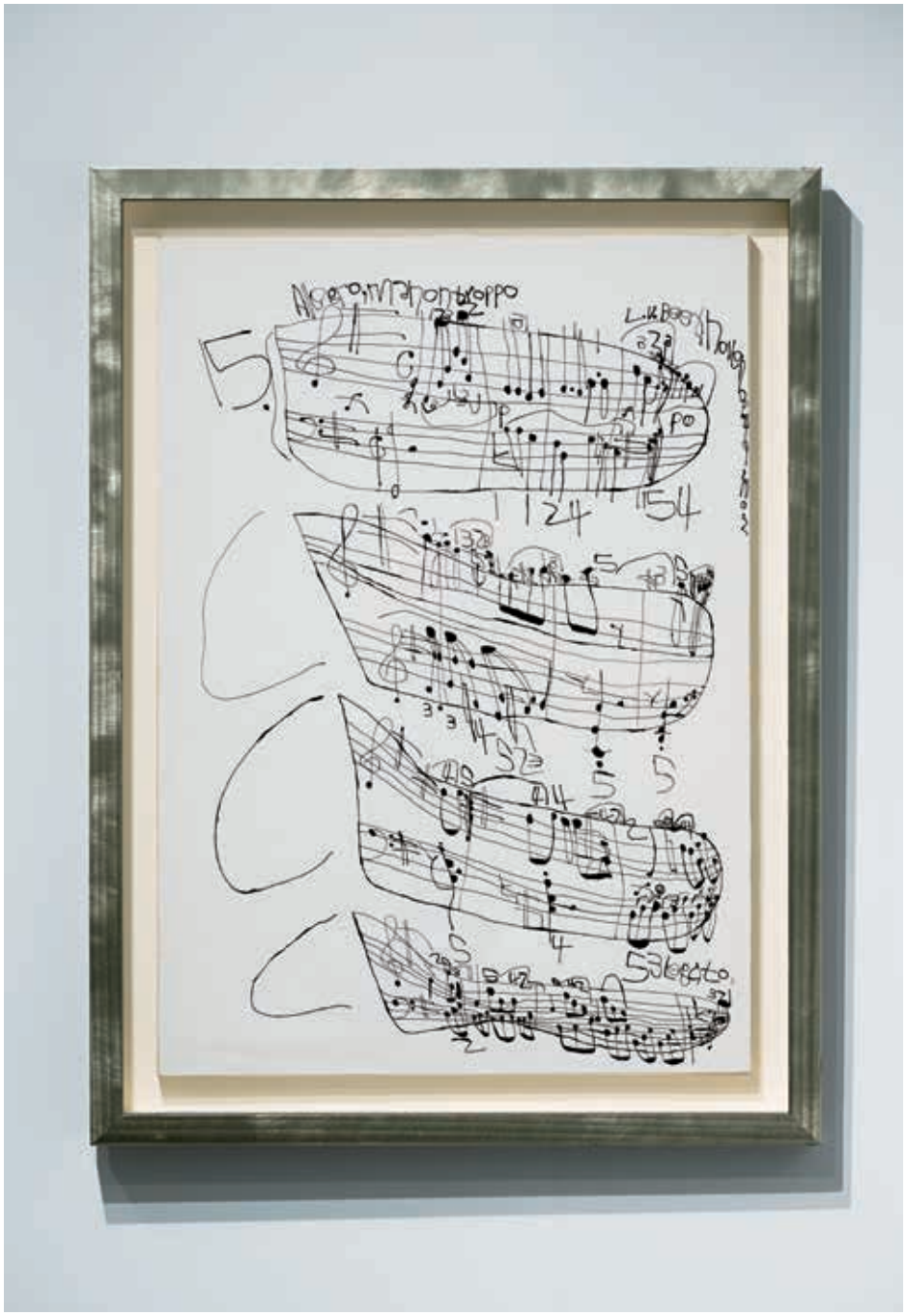




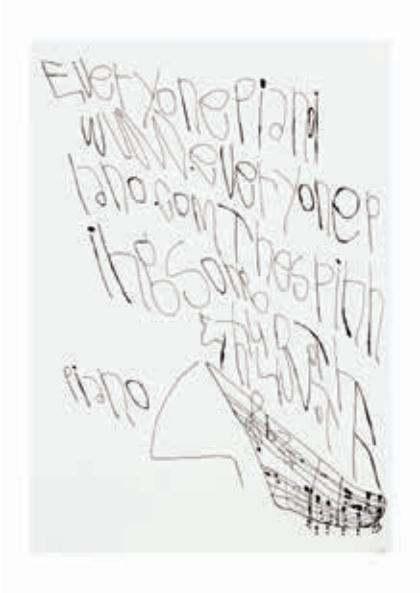
4-8　楽譜　故郷 | 2020年

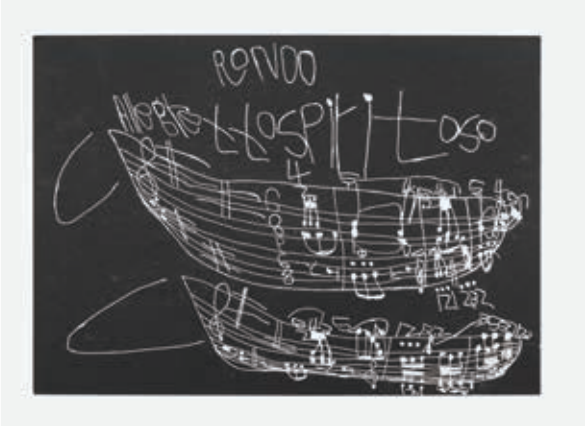
4-7　楽譜 AUSDER A-DUR SONATE | 2009年

4-5　楽譜 CHOPIN ｜ 2009年



4-6　楽譜 15.Allegro ｜ 2008年





4-1　塔 ｜ 制作年不詳　　4-2　十字架Ⅰ ｜ 制作年不詳
4-3　楽譜 Every one piano ｜ 制作年不詳　　4-4　楽譜 Spiritoso ｜ 2011年

資料映像 ｜ 2023年

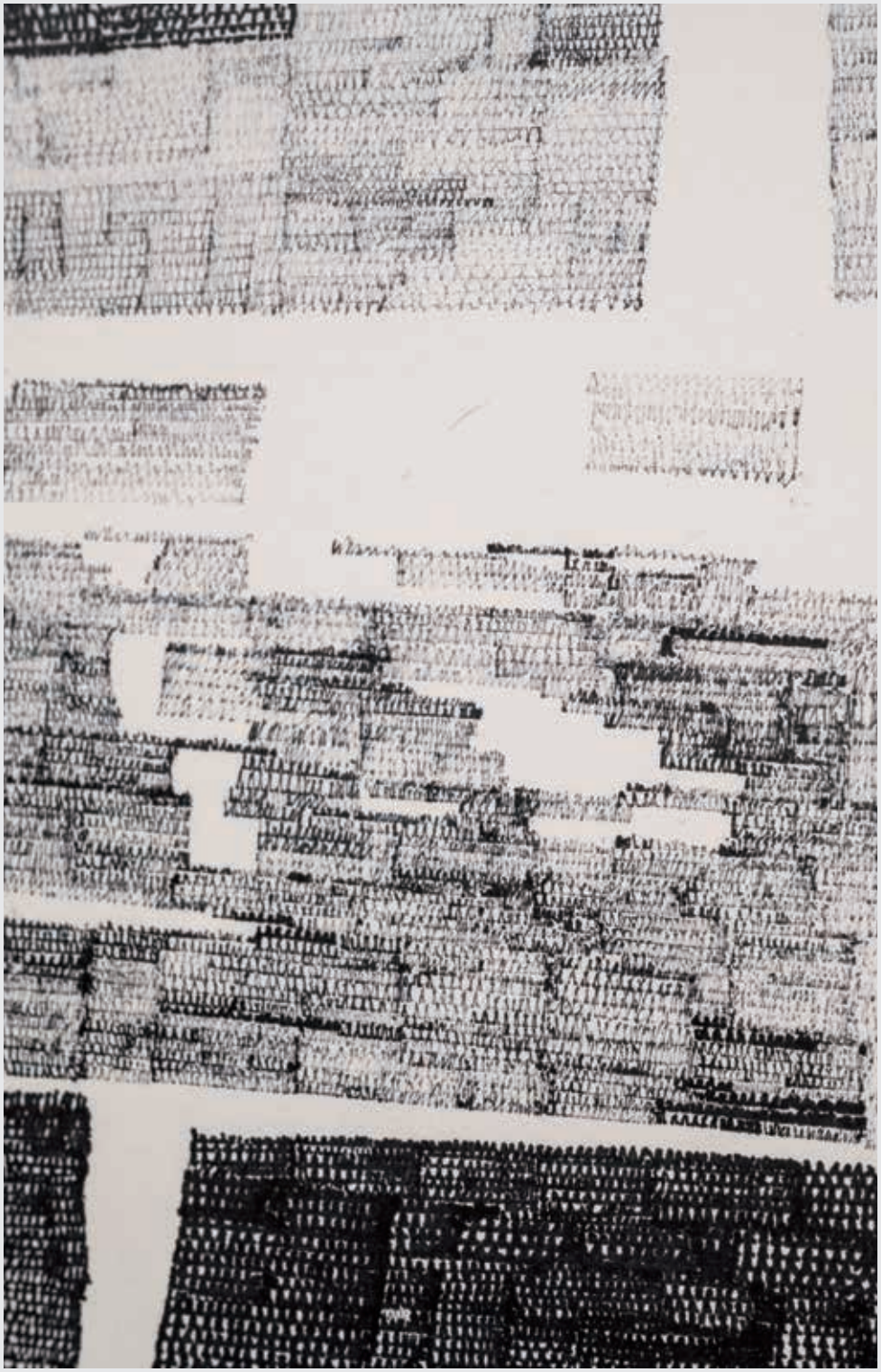
HIRASE Toshihiro

平瀬敏裕

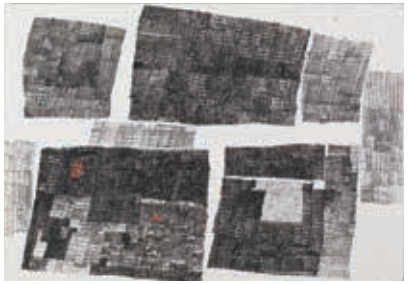
1971-

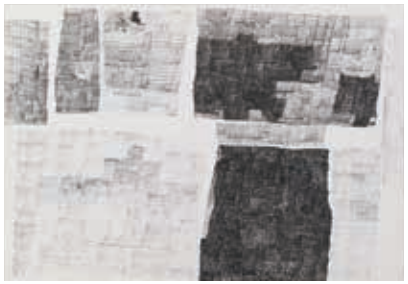
北海道生まれ。あかとき学園（北海道）に在籍する平瀬の創作は、2001年にノートの片隅に8つの×印を描いたことから突然始まったという。以来、週に5日、1日3時間の創作活動に地道に取り組んできた。一見すると色面が並ぶ抽象画のように見えるが、画面に近づいて見ると、色面は、無数の×印が集まるユニットであることに気がつく。×印は、独自のリズムでペンのインクがなくなるまで描き連ねるため、インクの擦れが自然と濃淡を生みだし、画面の中でニュアンスの異なる色面を構成している。この×印の連なりは、定規をあてて曲がらないように気遣いながら描かれるが、不規則に続けて描いたり飛び越えたりするため、色面はさらに複雑な濃淡を有し、見る者の視界が揺らぐ錯覚を起こすような空間になっている。画面の中で、重力を失ったかのように浮かぶ色面は、行為の集積によって描き出された偶然と必然が交錯する表現だ。
主な出展歴に、2010-2011年「アール・ブリュット・ジャポネ」パリ市立アル・サン・ピエール美術館（フランス）がある。

Born in Hokkaido. A member of the facility, Akatoki Gakuen (Hokkaido). HIRASE Toshihiro's involvement in art began suddenly, one day in 2001, when he drew eight "X's in the corner of a notebook page. He has since steadily produced drawings, working three hours a day, five days a week. At first glance, his works suggest abstract paintings composed of color fields, but a closer look reveals the fields to be units formed of clusters of countless X's. Because he continuously marks X's at his own rhythm until his pen runs dry, the ink smudges made by his hand naturally evolve into gradations of dark and light, and various expressive nuances are born. Hirase holds a ruler to the paper to confirm his lines' straightness, yet the X's he draws freehand often run over because he marks them one at a time, each different. As a result, the fields obtain even more complex gradations and become a visual space creating the sensation that our eyesight is blurred. The color fields, which seem to lose gravity and float up from the picture, are a style of expression at the intersection of coincidence and inevitability, resulting from the accumulation of his actions.
His main exhibitions include the 2010-2011 "Art Brut Japonais" (Halle Saint Pierre, France).



5-2　敏裕の世界2009 ｜ 2009年（部分）





5-2　敏裕の世界2009 | 2009年
5-1　敏裕の世界2000 | 2000年　5-5　敏裕の世界 | 2003年
5-4　敏裕の世界2005 | 2005年　5-3　敏裕の世界2002 | 2002年

資料映像 | 2023年

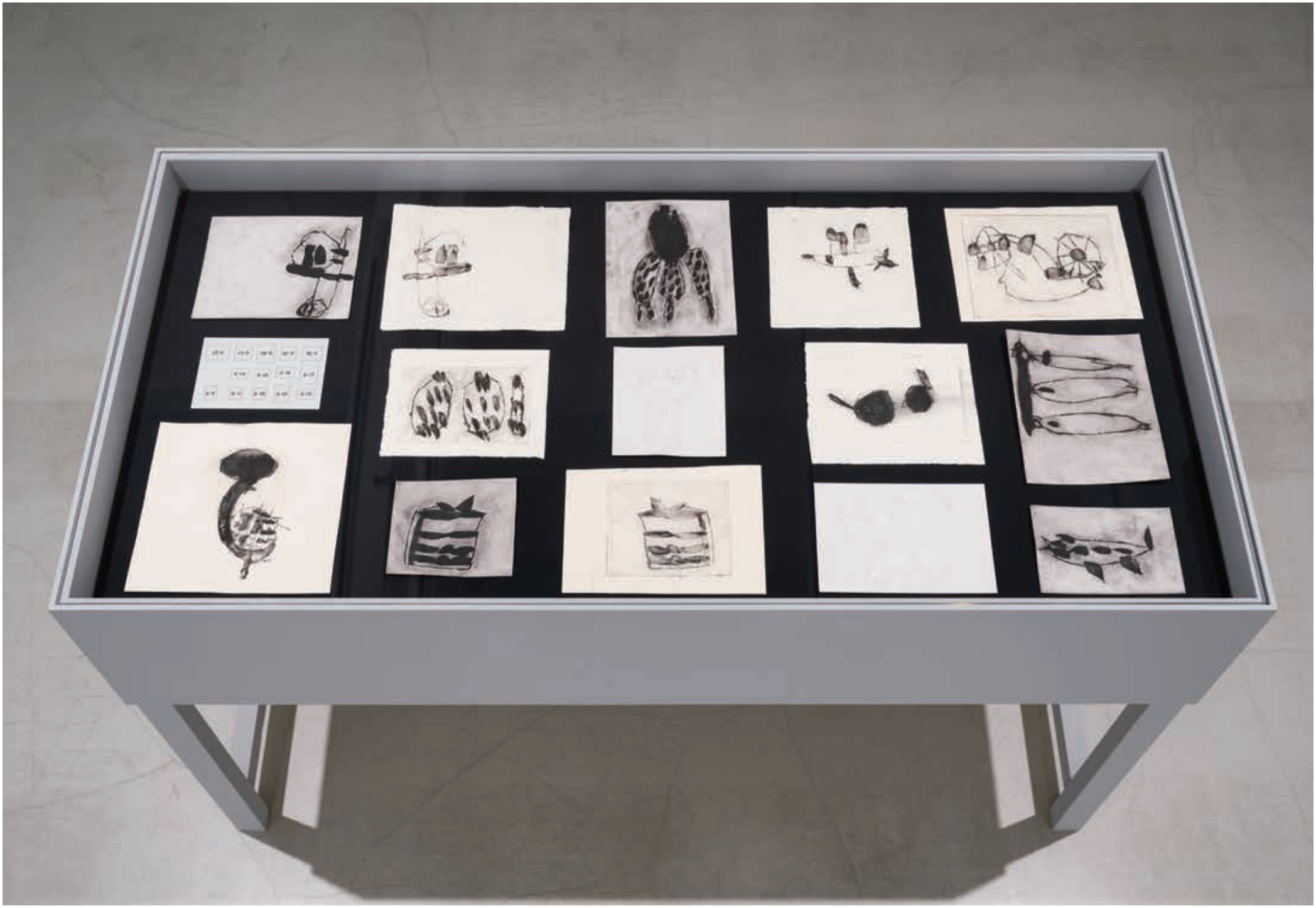
HORIGUCHI Yoshiteru

堀口好輝

1978-

京都府生まれ。京都市ふしみ学園 アトリエやっほぅ!!（京都府）にて制作する。ふくよかで愛らしいモチーフが浮かび上がる堀口の版画は、版となるプレートを直接削って描くドライポイントの技法でつくられる。プレートには、金属ではなく、白いボール紙を用いる。モチーフは、雑誌の切り抜きなどから選び、鉛筆で描いた下絵の線を、ニードルで削るようにしてなぞったり、手で剥がしたりして描画したプレートを原版に、刷りの工程――インクを刷り込み、版画用紙へ転写する作業――を経て作品は完成する。刷りは、施設職員の手によって行われる。版画は、刷りによって大きく印象を変えるメディアであるが、作品には、作家の創作の痕跡を引き立たせることに細心の注意が払われている。真っ白な版に刻まれた淡い線や面は、インクの滲みによって可視化され、画面の中でモチーフの新たな魅力を支えている。
主な出展歴に、2020年「ひぐちよしまさ ほりぐちよしてる 展」art space co-jin（京都府）がある。

Born in Kyoto Prefecture. Produces in “Atelier Yoohoo!!” at Kyoto City Fushimi Gakuen (Kyoto Prefecture). HORIGUCHI Yoshiteru’s prints featuring cute, plumply rounded motifs employ the drypoint technique of directly incising a plate used for printing. Horiguchi uses white cardboard for his plate rather than metal. Selecting motifs from articles clipped from magazines and other publications, he sketches lines in pencil to form his image. He then traces the lines with a needle to carve them out and sometimes peels off the paper between them. With this plate as the offset plate—to which ink is applied for transferring the image to printing paper—the work is printed and achieves completion. A facility staff member does the actual printing. Printmaking is a medium in which the printing process greatly changes a work’s impression, but careful attention is given to faithfully capturing the artist’s original handiwork. The faint lines and fields incised by Horiguchi in a pure white cardboard plate are brought out prominently by ink bleeding into the cardboard, an effect reinforcing the new appeal of the motifs in the picture.
His exhibitions include the 2020 “HIGUCHI yoshimasa HORIGUCHI yoshiteru” (art space co-jin, Kyoto Prefecture).



6-4　ビッグ・ベン ｜ 2022年

6-5　メーター ｜ 2016年　6-6　土星 ｜ 2018年

左上｜6-1　ジッパー2 ｜ 2016年　　左中｜6-3　ギター ｜ 制作2021年、刷2022年　　左下｜6-7　土星 ｜ 2018年
右上｜6-2　扇風機 ｜ 2019年　　右下｜6-8 「やまなみ So Happy」｜ 2015-2017年頃

資料映像 ｜ 2023年

YOSHIKAWA Toshiaki

吉川敏明

1947-1987

京都府生まれ。1966年に入所した障害者支援施設みずのき（京都府）の絵画教室[1]で制作した吉川は、モチーフを黒々と塗り込めた大胆な構図の木炭デッサンで知られる。木炭は、吉川が好んだ画材だが、その使用方法は、「芸大生らが及びもつかぬ荒々しい執拗なもので、画面を滑り落ち、それが空間に絶妙の調子をつけた」[2]という。色も形も削ぎ落とし、修正や手直しもしないというミニマムな表現にもかかわらず、木炭の美しいグラデーションは、黒いモチーフと余白をつなぎ、見事に安定した画面を構成している。施設の農作業で採れた玉ねぎは、繰り返し描いたモチーフのひとつだが、身構えることなく軽々と描かれたとはにわかに信じがたいバリエーションがあり、どの作品も、闊達な魅力を放っている。

国内外で多数の出品歴があり、1993年「パラレル・ヴィジョン　20世紀美術とアウトサイダー・アート」展と同時開催された「日本のアウトサイダー・アート」展へ出展し（共に世田谷美術館［東京都］）、翌年には、スイス・ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションに収蔵された。本展に出展の《ひょうたん》は、「日本のアウトサイダー・アート」展に出展されたうちの1点。

*1 みずのき絵画教室：1964年に、松花苑みずのき寮の余暇活動・情操教育として始められた絵画教室。高等学校などで美術教育に携わっていた日本画家の西垣籌一（1912-2000年）が指導した。1970年代後半からは、色彩感覚や構成力の向上を目的とした指導が行われ、1980年代には、集中的に「造形テスト」が行われた。

*2『みずのき寮からの発信　言葉はいらない 魂との出会い』展カタログ、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、1999年

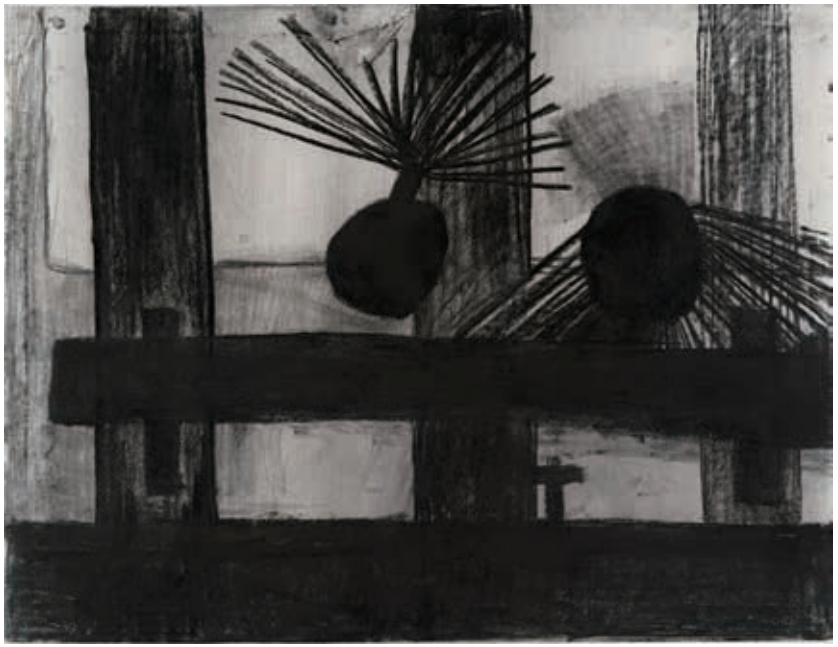
Born in Kyoto Prefecture. YOSHIKAWA Toshiaki is known for boldly designed charcoal drawings that feature dense black motifs. Such works he produced in the painting class[1] at the Mizunoki support facility for people with disabilities (Kyoto Prefecture) he entered in 1966. Charcoal was Yoshikawa's preferred medium. His method has been described as "rough, assertive expression beyond the capability of art university students, the charcoal spilling down the paper setting up the perfect tone for the space."[2] Although his work is minimal in expression due to his reduction of color and form without making corrections or touchups, his beautiful gradations connect the black motifs and white margins to form a splendidly balanced picture. Onions, farmed at the facility, were a motif he depicted repeatedly. In every work, we see variations displaying such free and vigorous form, it is hard to believe he tossed them off so fearlessly.

His numerous exhibitions in Japan and abroad include the 1993 "Parallel Visions—Modern Artists and Outsider Art" and concurrent "Outsider Art in Japan" (Setagaya Art Museum, Tokyo). In the following year, his drawings were acquired by Collection de l'art brut in Lausanne, Switzerland. His work in this exhibition, *Gourds*, is one of a series of pieces displayed in the "Outsider Art in Japan" exhibition.

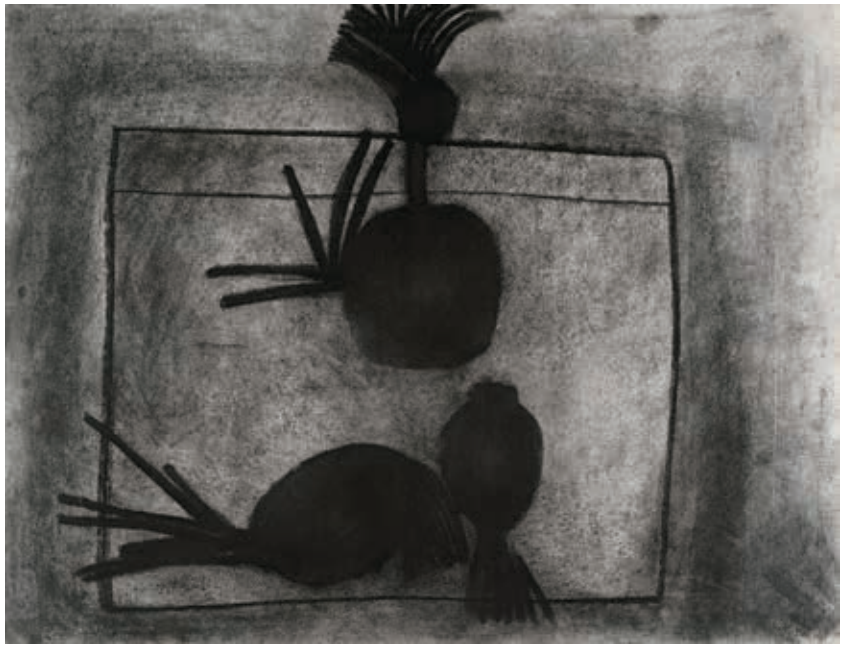
*1 Mizunoki painting class: A painting class started in 1964 as a leisure activity and for aesthetic sensitivity education at the Shokaen Mizunoki dormitory. It was taught by the Japanese-style painter NISHIGAKI Chuichi (1912-2000), who was involved in art education at high schools. From the latter half of the 1970s, instruction was provided to improve color sense and compositional skills, and in the 1980s, intensive "formative tests" were conducted.

*2 "*Mizunoki-ryo kara no Hasshin—Kotoba ha iranai, tamashi to no deai*" ("Statement from Mizunoki Dormitory, Words Not Needed, Encounter the Spirit") exhibition catalogue, Marugame Genichiro-Inokuma Museum of contemporary Art, 1999

7-1　ひょうたん ｜ 1981年（部分）



上｜7-4　イーゼルとタマネギ ｜ 1981年　　下｜7-2　玉ねぎ ｜ 1982年



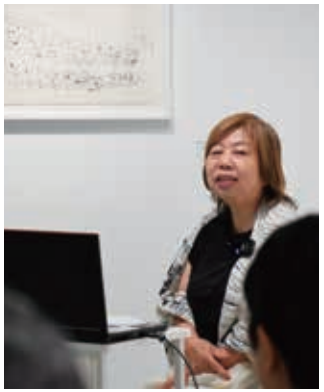
上｜7-3　たまねぎ ｜ 1981年　　下｜7-5　玉ねぎ ｜ 制作年不詳

7-1　ひょうたん ｜ 1981年

7-6　稲刈り ｜ 1981年

ドローイング+トーク
「おんがくが みえる、きこえる絵とその物語」

楽譜を見ながら独特の線で模写をする西岡弘治氏

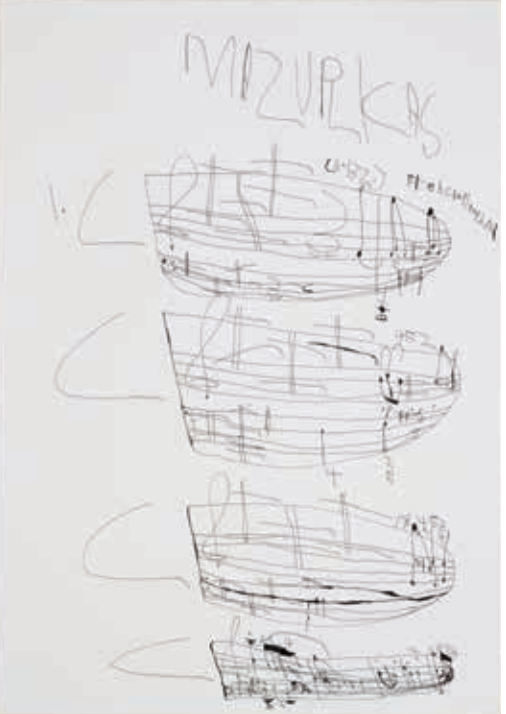


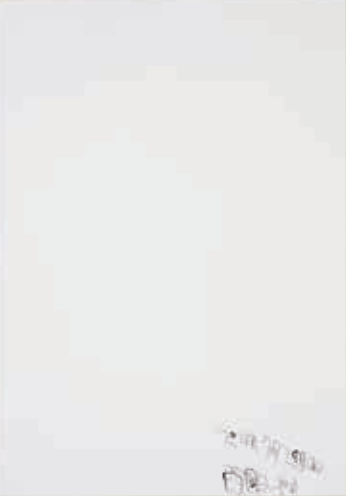
白岩高子氏

2023年7月28日(金)
公開制作:18時30分-19時30分
トーク:19時30分-20時15分
会場:東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1
出演・公開制作:西岡弘治(出展作家)
トーク:白岩高子(特定非営利活動法人コーナス 代表理事)
手話通訳:丸山垂穂、和田みさ

公開制作の記録映像と
あわせてご覧ください。

https://youtu.be/ssuQgYrQi4c





ライブドローイング完成作品　2023年
アトリエコーナス蔵　撮影:ただ(ゆかい)

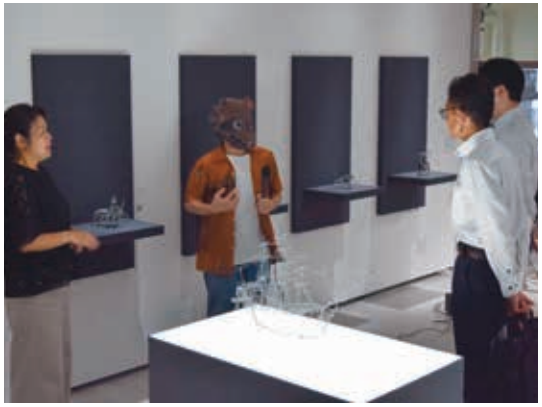
ドローイングの公開制作は、当初30分を予定していたが、創作は高い集中力で60分ほど続き、定例の仕上げ作業=作品の裏面に、施設職員が記した日付と氏名(西岡弘治)のメモを模写する方法でサインを書き込むまで行われた。その後、西岡氏を子どもの頃から見守る白岩氏に、日々の創作とエピソードについて、作品の画像やスナップ写真と共にお話を伺った。

担当学芸員によるギャラリートーク

8月4日(金)19時00分-19時30分
会場:東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2

作家ごとに、描き方や、作家や関係者を取材して見聞きしたエピソードなど、ハンドアウトの解説とは異なる視点で話した。

アーティスト・トーク
たぬきだshin



たぬきだshin氏

9月8日(金) 18時30分-19時00分
会場:東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室2
出演:たぬきだshin(出展作家)
手話通訳:和田みさ

制作を始めたきっかけや現在の活動、作品ごとのこだわりの個所などについてお聞きした後、実演制作した。太さの違う針金を自在に操り、わずか10分ほどでトンボを完成させた。

白鳥建二氏

鑑賞会
「みると話(わ)」

8月28日(月)14時00分-16時00分
9月12日(火)18時30分-20時30分
9月13日(水)18時30分-20時30分
会場:東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2
ナビゲーター:白鳥建二(全盲の美術鑑賞者/写真家)
進行:門あすか(展覧会担当学芸員)
手話通訳:丸山垂穂、和田みさ　※9月13日のみ

展示室で作品を囲み、見たこと感じたことを会話しながらグループで鑑賞した。鑑賞する作品は、主に各回3点程度、1作品につき20分程度の時間配分で、自由に発言したり、無言でじっくり観察したりしながら行った。

音声コンテンツ
いっしょにみる・きくガイド

全盲の美術鑑賞者として活動する白鳥建二氏をナビゲーターに、3名の出演者が、作品を見ながら展示室で自由に交わした会話を、録音・編集した音声コンテンツを作成した。来場者は、4人の会話を聞いて、想像を膨らませながら一緒に鑑賞を楽しんだ。（録音：小山友也、阪中隆文　編集：小山友也）

出演

白鳥建二（全盲の美術鑑賞者、写真家）

天羽絵莉子（特定非営利活動法人Art's Embrace理事）　|　髙橋賢次（恵比寿新聞編集長）　|　三好大輔（映画監督）

	作家名	時間	見ている作品の番号 ※作品リスト（pp.76-79）参照	図版：掲載ページ
	岡元俊雄 https://youtu.be/wvviwsBAvhE	約11分	作品：1-2	図版：p.20
	髙橋和彦 https://youtu.be/hMbcxs5D-MQ	約12分	作品：2-1	図版：p.26
	たぬきだshin https://youtu.be/ruRCI1BpmSg	約8分	作品：3-4	図版：p.34
	西岡弘治 https://youtu.be/PPjndRnbDNQ	約11分	作品：4-7	図版：p.41
	平瀬敏裕 https://youtu.be/DCbhVPoJIbM	約12分	作品：5-2	図版：p.50
	堀口好輝 https://youtu.be/CzWYIJR8W7I	約12分	作品：6-4	図版：p.58
	吉川敏明 https://youtu.be/OTHWpOjBF9A	約12分	作品：7-4	図版：p.66

はじめに（約1分）
https://youtu.be/SNmW2xIUMq8

おわりに（約1分）
https://youtu.be/pMYMmRbPzWo

収録後の振り返りトーク書き起こし（抜粋）

話し手　白鳥建二　|　天羽絵莉子　|　髙橋賢次　|　三好大輔　|　門あすか

※本編は、ウェブサイト「いっしょにみる・きくガイド」（https://inclusion-art.jp/monochrome_guide.html）に掲載

見て、話して、変わるイメージ

一同：おつかれさまでした
白鳥：いや〜本当ね、だって午前中100分やって、午後90分なので。本当に疲れたと思います
一同：（笑）
髙橋：でも、あっという間でした、僕は
一同：うんうん
白鳥：いや、早かった
三好：そうだね。（午後も）2時間近くやってたね
髙橋：でも、体感は1時間くらいだね
ああやって集中して見ると、いろんな見え方がするというのと、言語化することによって、自分にまた戻ってくるから、なんだかどんどん変化していくというのが、おもしろかったですね
三好：他の人たちの視点もあるから、そういうふうに見えるのか、ああ確かにそう見えるというのもあるし、これだけ集中して見るということが本当にないから、けっこうエネルギーを使い果たした感じですね
白鳥：今日はけっこう止まらなかったね、みんな
門　：会話がね、続いた。ずっと
白鳥：で、次から次へとイメージが変わってって
髙橋：それが多様な方がおもしろいんでしょうね。こう見えていく、ああ見えていくっていうことが

作品から広がるイメージ

天羽：一つの作品を見ていると、同じ作家さんの他の作品も見たくなるというか、「ああ、これはこういう意味だったのかな？」とか、それをあらためて「じゃあ他のはどうだろう？」みたいな。というのは今回すごく多かったです
白鳥：うんうん
三好：一個一個の作品が好きになっていくというか、ね。ああ、この人の考え方どうなんだろう？とか、こういうふうに描いていたのかな？とか想像しながら見てると、別にね、そんなに大きな関心をもってなくても。その人の作品が、なんかいいなって

白鳥さんに伝える

髙橋：言語化して、白鳥さんに伝えるというのが、すごいおもしろかったです。みんなこれを聞きながら作品を見るんですよね？
（中略）
髙橋：白鳥さんの頭の中でどう組み立てられているのかな？というのも、すごい気になったりするよね…
白鳥：もう、俺はね、好きなところだけ聞いてます。で、頭の中でやってるのは、聞いた言葉をビジュアルにするというのは目標にしてなくて、できるだけ言葉を拾うようにしていて、それをこう…自由にマッピングするみたいな感じで、頭の中においておくんですよ。平たく
一同：ふーん…
白鳥：で、その言葉だけじゃなくて、その作品に近づいて見ているのか？とか、その人の話し方の抑揚とか、そういうのも情報として加わって、で、できるだけ聞きとるようにしてて、それがつながったり、どこかが強調されたりみたいな
髙橋：ふーん…
白鳥：そう。だからあの最初キュウリで、ニワトリで、みたいなやつ（堀口好輝《ビッグ・ペン》※作品6-4）だと、たぶん、3人あんまり共有してない場面もあったと思うんだよね（笑）もう、それぞれ…
髙橋：バラバラのイメージ
白鳥：そうそう。それぞれの世界に入っちゃってるみたいな場面もあって。じゃあ、俺は、どこをとろうかな？みたいな（笑）だからいろいろ話が、話題がでると、その分選ぶ余地があるというのはおもしろいところではあります。はい
天羽：ふーん…
（中略）
髙橋：ここまでしゃべりたおして情報共有してというのが、やっぱりすごい新鮮だった。で、なんとか白鳥さんに伝えようというのが、だんだんこう…みんなに伝えようになってくる
白鳥：うん。そうそうそうそう
髙橋：これが、すごいおもしろい
門　：うんうん
三好：そうだよね。言葉にするってなかなか集中力もいるし、いろいろ自分の中にあるイメージを言語化するってけっこう難しくて、それをなんとかしぼり出して、しぼり出して、おいてみると「ああ、そうだったよね」だったり、「あ、でもそうじゃないんじゃない？」だったり、その違いが、ぜんぜん違うものを見てるなという感じが、すごい新鮮だよね

いつまでも続けられるということ

髙橋：この体験は、みんなした方がいいと思う
白鳥：（笑）
三好：した方がいいね。作品に対しての、理解できてるかどうかは別として、やっぱりそこに向かう時間の豊かさというか。こうやってね、おしゃべりしてるだけでも、ああ、みんなこんなに価値観が違うんだというのを共有していったりとか、見え方が違うっていうのをわかるのもたのしいし、自分が言ってても別に誰もそれを否定しないし、「ああ、そういうふうに見えるんだね」「ああ、たしかに見えるかも」みたいな。「こうです」という答えのないものをずーっと、だからずーっと眺めてられるというか、ずっといつまでも会話できるというか。
（中略）
髙橋：うーん、でもそれって一つのヒントですよね
白鳥：うん
髙橋：まぁ、世の中がちょっと分断しつつあるこういう時に、その関係性を維持していくという意識をどこでもつかということが、こういうことを癒す方法でもあるのかな〜なんて、うん。それを今回体験してみて、より理解が深まったというか。よかったです
三好：そう、考え方の違いとか見え方の違いを、自分と違うから「あ、それを理解したい」と思うというか
白鳥：うんうんうん
三好：隣の人との違いを理解して、「あ、僕にはこうしか見えないんだけど、え、こういうふうに言ってる。え、それどういうこと？」というふうに、寄り添いたくなるというか。それで最終的に理解はできないかもしれないけど
白鳥：知りたいという気持ちがね…
三好：そう。その知りたいという気持ちがすごい…なんかいい関係性をつくっているなぁ、というふうに
白鳥：うんうんうん

書き起こし：宇野澤昌樹、編集：門あすか

出展作品リスト

List of Works

岡元俊雄　OKAMOTO Toshio

＊やまなみ工房蔵
＊Collection of Atelier Yamanami

1-1　女の人 ｜ 2014年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Woman ｜ 2014 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-2　男の人 ｜ 2014年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Man ｜ 2014 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-3　女の人 ｜ 2013年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Woman ｜ 2013 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-4　女の人 ｜ 2013年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Woman ｜ 2013 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-5　男の人 ｜ 2018年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Man ｜ 2018 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-6　男の人 ｜ 2022年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.5×76.7 ｜＊
Man ｜ 2022 ｜ India ink on paper ｜ 108.5×76.7 ｜＊

1-7　男の人 ｜ 2014年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Man ｜ 2014 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-8　男の人 ｜ 2015年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Man ｜ 2015 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-9　女の人 ｜ 2022年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.5×76.7 ｜＊
Woman ｜ 2022 ｜ India ink on paper ｜ 108.5×76.7 ｜＊

1-10　男の人 ｜ 2017年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 108.7×76.7 ｜＊
Man ｜ 2017 ｜ India ink on paper ｜ 108.7×76.7 ｜＊

1-11　男の人 ｜ 2022年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 54.3×76.7 ｜＊
Man ｜ 2022 ｜ India ink on paper ｜ 54.3×76.7 ｜＊

1-12　トラック ｜ 2008年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 38×54 ｜＊
Truck ｜ 2008 ｜ India ink on paper ｜ 38×54 ｜＊

1-13　トラック ｜ 2008年 ｜ 墨汁・紙 ｜ 38×54 ｜＊
Truck ｜ 2008 ｜ India ink on paper ｜ 38×54 ｜＊

資料映像 ｜ 2023年 ｜ 1分44秒
映像提供・協力：社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房
編集：小川しゅんー
Document Video ｜ 2023 ｜ 1'44
Courtesy and Cooperated by Atelier Yamanami
Edited by OGAWA Shunichi

高橋和彦　TAKAHASHI Kazuhiko

＊社会福祉法人自立更生会 盛岡杉生園蔵
＊Collection of Morioka Sanseien

2-1　盛岡哀愁 ｜ 2012年 ｜ ペン・紙
78.9×109.1 ｜＊
Morioka's Sorrowful ｜ 2012 ｜ Ink on paper
78.9×109.1 ｜＊

2-2　謎の建物 ｜ 2014年 ｜ ペン・紙
25.2×35.45 ｜＊
Mysterious Building ｜ 2014 ｜ Ink on paper
25.2×35.45 ｜＊

2-3　チャグチャグ馬コ ｜ 2007年 ｜ ペン・紙
29.7×21 ｜＊
"Chagu Chagu Umakko" Horse ｜ 2007 ｜ Ink on paper
29.7×21 ｜＊

2-4　南部鉄器 ｜ 2006年 ｜ ペン・紙 ｜ 29.7×21 ｜＊
Nambu Tekki ("Nambu Ironware") ｜ 2006 ｜ Ink on paper
29.7×21 ｜＊

2-5　人のつながり ｜ 2013年 ｜ ペン・紙
21×29.7 ｜＊
Connection Among People ｜ 2013 ｜ Ink on paper
21×29.7 ｜＊

たぬきだshin　Tanukidashin

＊作家蔵
＊Collection of the artist

3-1　薩摩丸 ｜ 2014年 ｜ 針金 ｜ 44.5×64×17 ｜＊
Satsuma-maru ｜ 2014 ｜ Wire ｜ 44.5×64×17 ｜＊

3-2　蜘蛛魔女 ｜ 2020年 ｜ 針金 ｜ 17.5×20×18.5 ｜＊
Arache ｜ 2020 ｜ Wire ｜ 17.5×20×18.5 ｜＊

3-3　リザードマン ｜ 2020年 ｜ 針金
19.5×28×30 ｜＊
Lizard Man ｜ 2020 ｜ Wire ｜ 19.5×28×30 ｜＊

3-4　蛇龍 ｜ 制作年不詳 ｜ 針金 ｜ 13×23×26 ｜＊
Dragon ｜ Date unknown ｜ Wire ｜ 13×23×26 ｜＊

3-5　ミノタウロス ｜ 2021年 ｜ 針金 ｜ 19×11×11 ｜＊
Minotaur ｜ 2021 ｜ Wire ｜ 19×11×11 ｜＊

3-6　水上機 ｜ 2020年頃 ｜ 針金
18.5×16.5×14.5 ｜＊
Seaplane ｜ c.2020 ｜ Wire ｜ 18.5×16.5×14.5 ｜＊

3-7　外からみるクモ ｜ 2022年 ｜ 針金・瓶
2.2×5.1×2.2 ｜＊
Outer View of Spider ｜ 2022 ｜ Wire, Bottle
2.2×5.1×2.2 ｜＊

3-8　外からみるアリ ｜ 2022年 ｜ 針金・瓶
5.1×2.2×2.2 ｜＊
Outer View of Ant ｜ 2022 ｜ Wire, Bottle ｜ 5.1×2.2×2.2 ｜＊

資料映像 ｜ 2023年 ｜ 3分55秒
撮影：東京都渋谷公園通りギャラリー ｜ 編集：小川しゅんー
Document Video ｜ 2023 ｜ 3'55
Shot by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery ｜ Edited by OGAWA Shunichi

西岡弘治　NISHIOKA Koji

＊アトリエコーナス蔵
＊Collection of atelier CORNERS

4-1　塔 ｜ 制作年不詳 ｜ 墨汁・紙 ｜ 25.7×18.2 ｜＊
Steeple ｜ Date unknown ｜ India ink on paper
25.7×18.2 ｜＊

4-2　十字架 I ｜ 制作年不詳 ｜ 墨汁・紙
25.7×18.2 ｜＊
Cross I ｜ Date unknown ｜ India ink on paper
25.7×18.2 ｜＊

4-3　楽譜 Every one piano ｜ 制作年不詳
インク・紙 ｜ 38.3×27 ｜＊
Score *Every one piano* ｜ Date unknown ｜ Ink on paper
38.3×27 ｜＊

4-4　楽譜 Spiritoso ｜ 2011年 ｜ インク・イラストボード
36.4×51.5 ｜＊
Score *Spiritoso* ｜ 2011 ｜ Ink on illustration board
36.4×51.5 ｜＊

4-5　楽譜 CHOPIN ｜ 2009年 ｜ インク・紙
34.3×65.6 ｜＊
Score *CHOPIN* ｜ 2009 ｜ Ink on paper ｜ 34.3×65.6 ｜＊

4-6　楽譜 15.Allegro ｜ 2008年 ｜ インク・紙・パネル
59.5×42×1.5 ｜＊
Score *15.Allegro* ｜ 2008 ｜ Ink on paper, Panel
59.5×42×1.5 ｜＊

4-7　楽譜 AUSDER A-DUR SONATE ｜ 2009年
インク・紙・パネル ｜ 30×100 ｜＊
Score *AUSDER A-DUR SONATE* ｜ 2009年
Ink on paper, Panel ｜ 30×100 ｜＊

4-8　楽譜　故郷 ｜ 2020年 ｜ インク・紙
105×50 ｜＊
Score *Furusato* ｜ 2020 ｜ Ink on paper ｜ 105×50 ｜＊

資料映像 ｜ 2023年 ｜ 2分13秒
撮影：東京都渋谷公園通りギャラリー
画像提供・協力：特定非営利活動法人コーナス、アトリエコーナス
編集：小川しゅんー
Document Video ｜ 2023 ｜ 2'13
Shot by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery
Courtesy and Cooperated by CORNERS, atelier CORNERS
Edited by OGAWA Shunichi

平瀬敏裕　HIRASE Toshihiro

＊作家蔵
＊Collection of the artist

5-1　敏裕の世界2000 ｜ 2000年 ｜ ペン・紙
32×46.8 ｜＊
Toshihiro's World 2000 ｜ 2000 ｜ Ink on paper
32×46.8 ｜＊

5-2　敏裕の世界2009 ｜ 2009年 ｜ ペン・紙
52.5×78×1.7 ｜＊
Toshihiro's World 2009 ｜ 2009 ｜ Ink on paper
52.5×78×1.7 ｜＊

5-3　敏裕の世界2002 ｜ 2002年 ｜ ペン・紙
28×40 ｜＊
Toshihiro's World 2002 ｜ 2002 ｜ Ink on paper ｜ 28×40 ｜＊

5-4　敏裕の世界2005 ｜ 2005年 ｜ ペン・紙
28×40 ｜＊
Toshihiro's World 2005 ｜ 2005 ｜ Ink on paper ｜ 28×40 ｜＊

5-5　敏裕の世界 ｜ 2003年 ｜ ペン・紙 ｜ 28×40 ｜＊
Toshihiro's World ｜ 2003 ｜ Ink on paper ｜ 28×40 ｜＊

資料映像 ｜ 2023年 ｜ 2分41秒
撮影：東京都渋谷公園通りギャラリー
協力：社会福祉法人揺籃会 障がい者支援施設 あかとき学園
編集：小川しゅんー
Document Video ｜ 2023 ｜ 2'41
Shot by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery
Cooperated with Akatoki Gakuen ｜ Edited by OGAWA Shunichi

堀口好輝　HORIGUCHI Yoshiteru

＊京都市ふしみ学園 アトリエやっほぅ!!蔵
＊Collection of Atelier Yoohoo!!

6-1　ジッパー2 ｜ 2016年 ｜ ドライポイント
13.5×18 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Two Zippers ｜ 2016 ｜ Drypoint ｜ 13.5×18
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-2　扇風機 ｜ 2019年 ｜ ドライポイント
17.9×19.4 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Electric fan ｜ 2019 ｜ Drypoint ｜ 17.9×19.4
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-3　ギター ｜ 制作2021年、刷2022年
ドライポイント ｜ 14.7×21.1
刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Guitar ｜ Work:2021, Print:2022 ｜ Drypoint
14.7×21.1 ｜ Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-4　ビッグ・ベン ｜ 2022年 ｜ ドライポイント
29.8×20.9 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Big Ben ｜ 2022 ｜ Drypoint ｜ 29.8×20.9
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-5　メーター ｜ 2016年 ｜ ドライポイント
12.5×15.1 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Meters ｜ 2016 ｜ Drypoint ｜ 12.5×15.1
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-6　土星 ｜ 2018年 ｜ ドライポイント
11.5×13.3 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Saturn ｜ 2018 ｜ Drypoint ｜ 11.5×13.3
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-7　ひこうき ｜ 2019年 ｜ ドライポイント
10.1×14.6 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Airplane ｜ 2019 ｜ Drypoint ｜ 10.1×14.6
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-8　「やまなみ So Happy」 ｜ 2015-2017年頃
ドライポイント ｜ 21×22.4
刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
"*Yamanami So Happy*" ｜ c.2015-2017 ｜ Drypoint
21×22.4 ｜ Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-9　ホルン ｜ 制作年不詳 ｜ ドライポイント
10.1×14.6 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Horn ｜ Date unknown ｜ Drypoint
10.1×14.6 ｜ Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-10　ショートケーキ ｜ 2018年 ｜ ドライポイント
11.9×12.8 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Shortcake ｜ 2018 ｜ Drypoint ｜ 11.9×12.8
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-11　ショートケーキ（原版） ｜ 2018年 ｜ ボール紙
11.4×13 ｜＊
Plate "*Shortcake*" ｜ 2018 ｜ Cardboard ｜ 11.4×13 ｜＊

6-12　舞妓さん（原版） ｜ 2020年 ｜ ボール紙
12.9×18.2 ｜＊
Plate "*Maiko*" ｜ 2020 ｜ Cardboard ｜ 12.9×18.2 ｜＊

6-13　ひこうき（原版） ｜ 2019年 ｜ ボール紙
10.1×14.9 ｜＊
Plate "*Airplane*" ｜ 2019 ｜ Cardboard ｜ 10.1×14.9 ｜＊

6-14　ポーランドの街並み ｜ 2019年 ｜ ドライポイント
10×14.5 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Polish Townscape ｜ 2019 ｜ Drypoint
10×14.5 ｜ Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-15　ふくろう（原版） ｜ 2019年 ｜ ボール紙
14.5×12.3 ｜＊
Plate "*Owl*" ｜ 2019 ｜ Cardboard ｜ 14.5×12.3 ｜＊

6-16　眼鏡 ｜ 2017年 ｜ ドライポイント
11.3×15.9 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Glasses ｜ 2017 ｜ Drypoint ｜ 11.3×15.9
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-17　こいのぼり（原版） ｜ 2018年 ｜ ボール紙
19.6×15.4 ｜＊
Plate "*Koinobori*(Carp streamers)" ｜ 2018 ｜ Cardboard
19.6×15.4 ｜＊

6-18　バイク ｜ 2018年 ｜ ドライポイント
15×17.7 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Motorcycle ｜ 2018 ｜ Drypoint ｜ 15×17.7
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-19　プロペラ機 ｜ 2016年 ｜ ドライポイント
13.5×14.3 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Plopeller plane ｜ 2016 ｜ Drypoint ｜ 13.5×14.3
Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-20　サボテン（原版） ｜ 2018年 ｜ ボール紙
19.9×14.9 ｜＊
Plate "*Cactus*" ｜ 2018 ｜ Cardboard ｜ 19.9×14.9 ｜＊

6-21　太陽の塔 ｜ 2018年 ｜ ドライポイント
14.9×17.8 ｜ 刷：アトリエやっほぅ!! ｜＊
Tower of the Sun ｜ 2018 ｜ Drypoint
14.9×17.8 ｜ Printed by Atelier Yoohoo!! ｜＊

6-22　太陽の塔（原版） ｜ 2018年 ｜ ボール紙
19.9×14.9 ｜＊
Plate "*Tower of the Sun*" ｜ 2018 ｜ Cardboard
19.9×14.9 ｜＊

資料映像 ｜ 2023年 ｜ 3分09秒
映像提供・協力：京都市ふしみ学園 アトリエやっほぅ!!
編集：小川しゅんー
Document Video ｜ 2023 ｜ 3'09
Courtesy and Cooperated by Atelier Yoohoo!!
Edited by OGAWA Shunichi

吉川敏明　YOSHIKAWA Toshiaki

＊みずのき美術館蔵
＊Collection of MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA

7-1　ひょうたん ｜ 1981年 ｜ 木炭・木炭紙
49.7×64.9 ｜＊
Gourds ｜ 1981 ｜ Charcoal on paper ｜ 49.7×64.9 ｜＊

7-2　玉ねぎ ｜ 1982年 ｜ 木炭・木炭紙
49.8×64.9 ｜＊
Onions ｜ 1982 ｜ Charcoal on paper ｜ 49.8×64.9 ｜＊

7-3　たまねぎ ｜ 1981年 ｜ 木炭・木炭紙
49.7×64.7 ｜＊
Onions ｜ 1981 ｜ Charcoal on paper ｜ 49.7×64.7 ｜＊

7-4　イーゼルとタマネギ ｜ 1981年 ｜ 木炭・木炭紙
50.2×65 ｜＊
Easel and onions ｜ 1981 ｜ Charcoal on paper
50.2×65 ｜＊

7-5　玉ねぎ ｜ 制作年不詳 ｜ 木炭・木炭紙
49.6×64.8 ｜＊
Onions ｜ Date unknown ｜ Charcoal on paper
49.6×64.8 ｜＊

7-6　稲刈り ｜ 1981年 ｜ 木炭・木炭紙
49.8×65 ｜＊
Rice harvesting ｜ 1981 ｜ Charcoal on paper
49.8×65 ｜＊

資料映像（制作風景）URL

URL of the Document Videos

岡元俊雄 OKAMOTO Toshio	https://youtu.be/p4sNU_N0Swg
たぬきだshin Tanukidashin	https://youtu.be/wKaB28zi1I0
西岡弘治 NISHIOKA Koji	https://youtu.be/LXS6fvOjQVQ
平瀬敏裕 HIRASE Toshihiro	https://youtu.be/CmNfhPX1arA
堀口好輝 HORIGUCHI Yoshiteru	https://youtu.be/On1dRBeaY0w

Foreword

The Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is pleased to present the exhibition, “Imaginative Drawings in Monochrome”.

This exhibition looks at the unique expressive world of a limited monochrome color palette. Featured are works employing drawing tools such as charcoal, pen, and needle, works employing materials rarely used for drawing—such as wire—and works whose image emerges from inscribed words and icons.

Depiction can mean an act that produces a visible form as well an act producing no visible form. It can mean using lines to depict a figure with a tool on a flat surface, but it can also mean to depict an image in one’s mind. To depict, as such, expresses an action broad in meaning. Monochrome, on the other hand, calls to mind creative expression using a single color or gradations. Even when limited to black and white, however, monochrome’s expressive possibilities are unlimited owing to differences in media and drawer sensibilities.

Transitioning from white to black in monochrome can also employ wide-ranging gradations, and even when appearing pure white or pure black, subtle differences in tone or shade will produce beautiful shadows and evoke an image in the viewer’s mind. As viewers, feeling our eye to be restrained by the limited colors, we intuitively observe the work in detail and register our impressions in our mind, sensing a deeper image world lurking behind the phenomena depicted. Depiction, we can say, is not only an act of the artist but also of viewers, who depict the work in their minds.

Seeing this exhibition, we hope you will enjoy letting your imagination run free, inspired by the rich world of creation and imagination that monochrome offers.

We would like to express our sincere gratitude to the artists for their generous loan of works for this exhibition, and to everyone whose valuable advice and cooperation helped make it a reality.

July 2023

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Monochrome's Expansive World of Expression

MON Asuka
(Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Introduction

As its title suggests, "Imaginative Drawing in Monochrome" was an exhibition concerned with "monochrome" and "drawing." Monochrome means the use of a single color, regardless of whether black or any other color. The featured artists also work in multiple colors, but this time, we limited our selection to works by these artists using only black and white. The exhibition's aim was to focus on each artist's drawings in a way enabling viewers to connect with his unique perception of the world. It is easier to identify artists' characteristics in an achromatic world. Limiting the venue to works in black and white renders the individuality of each artist's pieces clear, making comparisons of their differences easier.

To close in on the meaning of "drawing," on the other hand, we slightly enlarged our perspective on drawing as an established concept. This meant including prints and three-dimensional works in addition to hand-drawn pictures and featuring 67 works by 7 artists who employ highly original methods of production. Their diverse technical styles include copying and sketching as well as fictional creation, and their expressive styles range from abstract to detailed. In addition to orthodox drawing materials such as India ink, charcoal, and pen, they employ paper printing plates and wire as drawing tools. Works using the most common art tools, pencil or paint, were not even included. This is how broad "drawing" is as a theme.

By thus limiting exhibits to black and white monochrome expression, we narrowed the focus of viewing and looked well at each artist's creative source—the object of their attention or their motivation for drawing. Just as a scene appears more vivid and clear when viewed through a pinhole, establishing monochrome as a theme was a device for eliminating peripheral information to focus solely on the object. By zooming in on each artist and his art, in this way, we sought to grasp their power of expression through methods entirely their own, unconstrained by existing values in art, and close in on the essence of drawing.

How the Galleries Were Arranged

The Shibuya Koen-dori Gallery in Tokyo has two galleries with different features. Drawings by the five artists OKAMOTO Toshio, TAKAHASHI Kazuhiko, NISHIOKA Koji, HIRASE Toshihiro, and YOSHIKAWA Toshiaki were presented in Gallery 1, which has walls on all sides. Those of two others, print artist HORIGUCHI Yoshiteru and three-dimensional artist Tanukidashin, were displayed in Gallery 2, an open space featuring a spiral staircase.

By coincidence, several of the artists in Gallery 1 had exhibited overseas as Japanese Art Brut / Outsider Art. The two artists in Gallery 2, meanwhile, had mainly shown their work in Japan, especially the Kansai region. We loosely ordered the artists and artworks by style, expression, and art media without partitioning the spaces with walls or establishing a viewing route. Videos of five of the seven artists—Okamoto, Tanukidashin, Nishioka, Hirase, and Horiguchi—taken by this writer and by artists' staff were also edited and displayed. The videos showed the artists at work, their hands in close-up. Monitors were installed at the back of the galleries so that visitors could watch the videos after viewing the works. By such means, the galleries enabled visitors to visually access and compare information from works, videos, and commentaries as part of their viewing experience and thereby gain a deeper appreciation.

Each Artist's Approach to Drawing and Production

Hereafter, I will discuss the characteristics of each artist's drawings and similarities and differences between them, starting with Okamoto Toshio's work exhibited in the center of Gallery 1. Okamoto was the first artist visitors encountered on entering the gallery, followed by Nishioka, Hirase, Takahashi, and Yoshikawa in a clockwise direction around its walls, and finally Horiguchi and Tanukidashin in Gallery 2.

Okamoto's approach to drawing is unique. Reclining on the floor alongside his paper, head propped on one elbow, he draws larger-than-life portraits while looking at books, magazines, or photographs. His distorted perspective from that low angle should logically result in a distorted picture. Yet, his portraits, rendered dramatically in India ink with a disposable chopstick, employ rich drawing techniques—three-dimensional depth built by layering thin lines and dark rubbed-in color fields, and dynamism generated with splashed ink droplets. His drawing of a truck observed from a car window during a drive faithfully captures the details of his moving motif,[1] prompting our realization that he has memorized the motif's shapes in order to draw them. A keen eye: this is Okamoto's strongest feature.

Moving on to the walls, we begin with works also drawn in India ink. In *Steeple* and *Cross I*,[2] drawings employing India ink and brush, we are immediately conscious of the artist's commitment to the shapes of lines. Nishioka Koji is known for his copies of musical scores drawn in pen. What he creates, however, is absolutely not a faithful copy of the score but a uniquely creative arrangement of its elements, altering the score to a point where it is more accurately called a motif than a copy. I dare refer to his works as copies, above, because of his technique. During live drawing for a related event of this exhibition,[3] I watched him intently study the score he had before him—one he had previously drawn many times—while carefully transmitting it to drawing paper with a ballpoint pen. A pen is a tool suited to drawing lines of even thickness, but Nishioka uses the pen to repeatedly redraw and shape his lines into eye-catching forms. When comparing his pen-drawn lines with those drawn with a brush, we notice a similarity in the way they rise and fall. When

following Nishioka's lines with our eye, the flow of their shapes is pleasant like the rise and fall of musical sound, and we feel as if music were being performed.

Hirase Toshihiro, who also works in pen, draws abstract pictures whose clusters of X's appear like rectangular color fields. This exhibition featured works from the ten or so years following his first artwork clearly displaying X's.[4] Comparing their details, we find his X's gradually losing their shape and becoming V's and W's. The video shows Hirase employing his distinctive technique of drawing while applying a ruler, closely attentive to horizontal expression. From his manner of drawing, as if writing a letter, and the story about his start as an artist—that he drew X's in the corner of a notebook page one day—we cannot but feel that drawing may be Hirase's personal means of communication. His artworks raise the question: what do we consider a work of art?

Takahashi Kazuhiko's drawings, in contrast, are detailed landscapes composed of concrete images drawn in pen. His A4-size works generally depict a single scene, while larger works combine several scenes in a collage-like composition. Besides scenes from photographs, Takahashi drew landscapes observed and experiences lived, rendering them counterclockwise from the bottom left of the picture.[5] His works in this exhibition depict scenes of daily life and motifs related to Iwate Prefecture, where he lived. Takahashi also loved to travel and visited France in 2010. Among his many drawings kept at the facility where he resided are works such as *Mysterious Building* that recall buildings in other lands. While depicting a world of his own creation based on images in his mind, Takahashi's landscapes also conjure up images in viewers' minds. Through the interplay of two worlds, creation and imagination, they evoke a strange sensation in us.

Yoshikawa Toshiaki also depicted familiar scenes as his motif. This exhibition primarily featured charcoal drawings from 1981 to around 1982. Charcoal generally gives an academic impression, as a medium, but Yoshikawa created his drawings in the "Mizunoki Painting Class" instructed by Japanese-style artist Nishigaki Chuichi (1912-2000).[6] I say "instructed," but Nishigaki freely allowed students to draw in any way they wished. In fact, as described in the artist commentary referenced by this writer, Yoshikawa's use of charcoal was coarse and bold,[7] and his compositions display characteristics—such as his extremely close cropping—not found in works by people who have studied charcoal. In addition, although charcoal is a medium enabling erasures and redrawing, there is almost no sign of this in Yoshikawa's works.[8] As a result, his charcoal stays black on the paper without smudging, and the scenery created by charcoal powder flowing down into the margin is fresh and beautiful.[9] For this exhibition, works with particularly distinctive compositions were selected. Among them, the four works employing onions as motifs[10] are similar in composition to the "formative tests" conducted by Nishigaki.

We move next to Gallery 2. Horiguchi Yoshiteru's prints are the fruit of collaborative production between Horiguchi, who creates the printing plates, and day-care center staff, who handle the printing. Horiguchi began creating artworks in this way around 2009. A daily routine of drawing with short strokes led him to carving a paper printing plate with a needle, a method commonly known as paper drypoint. In the video, we see how he carves the blank white plate, creating as he

goes along. In that state, his shapes are hard to discern on the plate, but when the plate is printed, the loosely formed motifs emerge into view. Horiguchi's works impart a gentle impression, seemingly reflecting his taste for cute items.

Tanukidashin, in contrast, creates motifs from his imagination, modeling ships and fanciful characters into form by manipulating wires of different thicknesses with great precision as if line-drawing in space. We edited our video of him to show how the dragonfly he began creating, prompted by our conversation during my visit, was completed in just 16 minutes. At no point did he pause midway to rework any aspect of the piece. He creates every sculpture with minimum modeling, and the wire is less dense and lighter weight than it appears. What transformation occurs, we wonder, when an image existing only in Tanukidashin's mind obtains reality in his hands?

Conclusion

The art of people who create in their own way, unconstrained by existing values, is sometimes described as impulsive. Impulse is perhaps always an aspect of human creativity. Yet, what we see when narrowing our perspective to look as if "through a pinhole" at a world of black and white monochrome is a well-honed eye, rich expressiveness, excellent handiwork, and imaginative creation. In the galleries, visitors could be seen approaching the works closely, responding with interest to insights from commentary and videos, moving back and forth between the works and between the works and monitors, and otherwise unhurriedly immersing themselves in the artworks' world. In the questionnaire, many visitors described their impressions of the works: the range of expression they achieve using simple colors, their power and delicacy, and how they looked different after watching the videos. We hope that this exhibition gave viewers opportunity to encounter artists and their works from new perspectives and to open up the world of imagination in their own minds.

---

1 Please refer to p.18 of this catalogue.

2 Please refer to p.44 of this catalogue. Early works prior to drawing scores.

3 Please refer to p.70 of this catalogue. Drawing + Talk: "Pictures You Can See and Hear Music in and Their Stories."

4 Please refer to p.50 of this catalogue. 5-1 *Toshihiro's World 2000*, 2000.

5 Please refer to p.25 of this catalogue.

6 Please refer to p.62*1 of this catalogue. Sketching still lifes in the classroom and sketching outdoors were offered.

7 Please refer to p.62 of this catalogue.

8 "On occasions, drawing would progress from left to right in the picture, and ended on reaching the opposite margin. Absolutely no revisions or touch-ups were made. Nevertheless, the spatial composition was exquisite, even perfect, one could say." *Kotoba ha iranai, tamashi to no deai, Mizunoki-ryo kara no Hasshin* ("Words Not Needed, Encounter the Spirit, Statement from Mizunoki Dormitory"), exhibition catalogue, Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Art, 1999, p.57.

9 "Charcoal was his favorite medium. No one could imitate his unique deep black." Yohei Nishimura supervision, *At the Creation: The origin of Mizunoki art,* Toho Shuppan, 2003, p. 100.

10 Please refer to pp. 66-67 of this catalogue.

主要参考文献

『パラレル・ヴィジョンー20世紀美術とアウトサイダー・アート　日本のアウトサイダー・アート』展カタログ、世田谷美術館、1993年

『世田谷美術館年報 平成5年度』世田谷美術館、1995年

『みずのき寮からの発信　言葉はいらない 魂との出会い』展カタログ、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、1999年

西村陽平監修『みずのきの絵画　鶏小屋からの出発』東方出版、2003年

はたよしこ編著『アウトサイダー・アートの世界―東と西のアール・ブリュット』紀伊國屋書店、2008年

『アール・ブリュット・ジャポネ』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、現代企画室、2011年

『第四回「こころのアート展」in しあわせの村 2014』展カタログ、しあわせの村、2014年

『生命（いのち）の徴（しるし）　滋賀と「アール・ブリュット」』展カタログ、滋賀県立近代美術館、2015年

『アール・ブリュット魅力発信事業報告書 アール・ブリュットが繋ぐ　平成27年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業』
アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会、2016年

白岩高子監修『プレイボーイ ～伝説の西岡～』大阪ブリキ玩具資料室、2016年

『日本のアール・ブリュット　KOMOREBI展』カタログ、フランス国立現代芸術センター “リュー・ユニック”、2017年

『みずのき美術館 コレクション１』みずのき美術館、2017年

『ジャパン×ナント プロジェクトの全貌 障害者の文化芸術国際交流事業 2017 ジャパン×ナントプロジェクト｜報告書｜』
文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、2018年

『日本のアール・ブリュット　もうひとつの眼差し』展カタログ、アール・ブリュット・コレクション編、国書刊行会、2018年

『みずのき美術館 コレクション２』みずのき美術館、2020年

小林瑞恵『アール・ブリュット　湧き上がる衝動の芸術』大和書房、2020年

『about me 4 ～“わたし”を知って～ 言語化できないコトバ』展カタログ、国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）、2021年

『人間の才能　生みだすことと生きること』展カタログ、滋賀県立美術館、2022年

『（た）よりあい、（た）よりあう。』展カタログ、はじまりの美術館、2022年

ART BRUT JAPONAIS, exh. Cat., HALLE SAINT PIERRE, Sitbon & Associés, 2010

ART BRUT JAPONAIS II, exh. Cat., HALLE SAINT PIERRE, Suisse Imprimerie: Paris, 2018

［ビデオ映像資料］

代島治彦監督『日本のアウトサイダーアート Vol.7「異端のデフォルメ」』はれたりくもったり、2009年、DVD

写真／アートワーク クレジット

撮影：ただ（ゆかい）［pp.10-43, 45-65, 68-69, 71］
画像提供：特定非営利活動法人コーナス［p.44］、みずのき美術館［pp.66-67］
記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影
アートワーク：置田陽介（Attitude inc.）［表紙 , p.9］

Photo and Artwork Credits

Photo: TADA(YUKAI) [pp.10-43, 45-65, 68-69, 71]
Photo Courtesy: CORNERS [p.44], MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA [pp.66-67]
All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.
Artwork: OKITA Yosuke(Attitude inc.) [cover, p.9]

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、
心よりお礼申し上げます。
（順不同／敬称略）

岡元俊雄
高橋和彦
たぬきだshin
西岡弘治
平瀬敏裕
堀口好輝
吉川敏明

明子アルガマ
椢葉朋子
大澤咲子
小川しゅんー
置田陽介
奥岡なぎ
奥村恵子
奥山理子
柿島貴志
笠松彩菜
加藤美知子
小玉 篤
小林知典
阪本 結

佐藤尚史
白岩高子
杉山佳織
ただ
中島慎也
平田友也
藤原清史
藤原沙羅
ブライアン・アムスタッツ
星 肖江
眞島孝弘
山下完和
横井 悠

公益財団法人こうべ市民福祉振興協会
社会福祉法人京都障害者福祉センター
京都市ふしみ学園 アトリエやっほぅ!!
社会福祉法人松花苑 みずのき美術館
社会福祉法人自立更生会 盛岡杉生園
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房
社会福祉法人揺籃会 障がい者支援施設 あかとき学園
特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス

東京都渋谷公園通りギャラリー　展覧会「モノクローム　描(えが)くこと」
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery Exhibition: Imaginative Drawings in Monochrome

展覧会

企画・担当：門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）
会場施工：スーパー・ファクトリー株式会社
作品輸送・展示：カトーレック株式会社
照明：合同会社サムサラ
額装：株式会社テラ、POETIC SCAPE
広報物アートディレクション・デザイン：置田陽介（Attitude inc.）
広報物デザイン：平田友也（Attitude inc.）
広報物印刷：株式会社ライブアートブックス
広報：浅野百衣、岡田なつき、加藤志保（東京都渋谷公園通りギャラリー）
翻訳：ブライアン・アムスタッツ（アムスタッツ・コミュニケーションズ）
ハンドアウト印刷：情報印刷株式会社
撮影：ただ（ゆかい）
資料映像編集：小川しゅんー
会場記録映像：新明就太

カタログ

企画・執筆・編集：門あすか
翻訳：ブライアン・アムスタッツ（アムスタッツ・コミュニケーションズ）[pp.12,22,28,36,46,52,62,81-85]
アートディレクション・編集：置田陽介（Attitude inc.）
デザイン・編集：平田友也（Attitude inc.）
印刷・製本：株式会社ライブアートブックス
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー
発行日：2024年1月

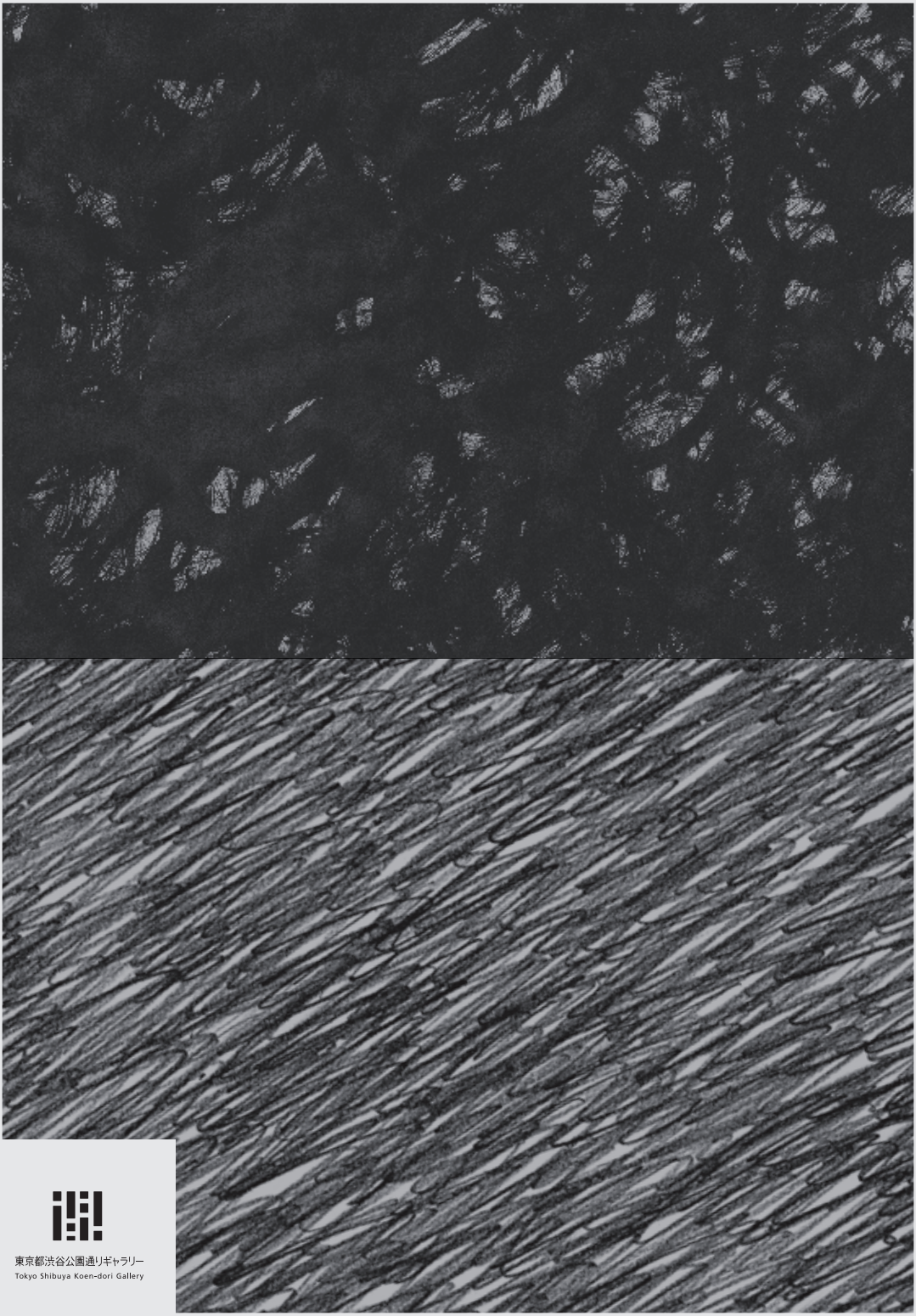
Exhibition

Currator: MON Asuka (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Venue Construction: Super・Factory Inc.
Transportation and Installation: Katolec Co.
Lighting: Samusara LLC
Framing: TERA inc., POETIC SCAPE
Art Direction and Design of Publication: OKITA Yosuke (Attitude inc.)
Design of Publication: HIRATA Tomoya (Attitude inc.)
Publication Printing: LIVE Art Books Inc.
Press Officer: ASANO Moe, OKADA Natsuki, KATO Shiho (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Translation: Brian AMSTUTZ (Brian Amstutz Communications)
Handout Printing: Johoprint Co. ltd
Photography: TADA (YUKAI)
Editing of Document Video: OGAWA Shunichi
Videography of the Venue: SHIMMYO Shuta

Catalogue

Planning, Texts, Editing: MON Asuka
Translation: Brian AMSTUTZ (Brian Amstutz Communications)
Art Direction, Design and Editing: OKITA Yosuke (Attitude inc.)
Design and Editing: HIRATA Tomoya (Attitude inc.)
Printing and Binding: LIVE Art Books, Inc.
Publisher: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Publication Date: January 2024

Artwork © The Artist
© 2024 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery